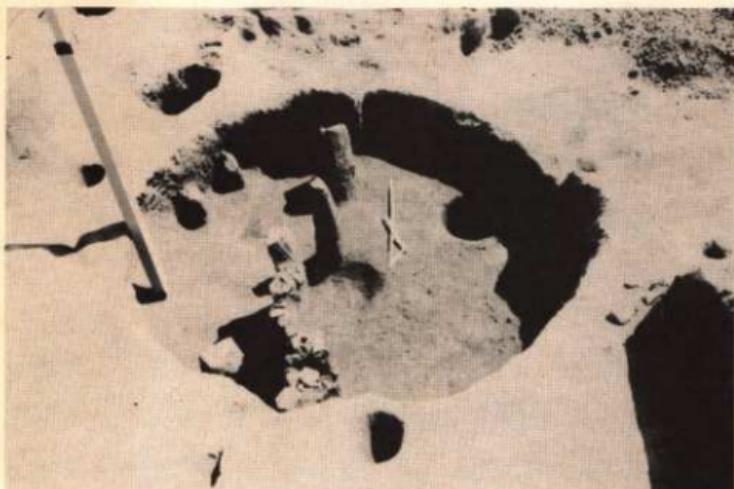


# 妻の神遺跡発掘調査報告書

(第二次発掘調査)



(写1. 繩文時代前期円筒下層d式土器を伴う3号土壙)

1977. 3.

青森県北津軽郡金木町教育委員会

妻の神遺跡調査報告書正誤表

| 頁  | 行  | 誤             | 正              |
|----|----|---------------|----------------|
| 9  | 上  | (P、L )        | (P、L 2、P28)    |
| 9  | 下  | 出土状況          | 出土状況           |
| 11 | 上  | T、P~7号        | T、P1~7号        |
| 12 |    | ①スナップ写        | ①スナップ写真        |
| 12 |    | ②出土状況写        | ②出土状況写真        |
| 24 | 25 | 5cm IIa       | 5cm IIa 層      |
| 25 | 3  | T、P10~15      | T、P10~14       |
| 30 | 1  | 横張区           | 竪張区            |
| 30 | 下  | 横張区           | 竪張区            |
| 31 | 図  | P は →         | -----の上につく     |
| 31 | 15 | IIa'内         | IIa' 層内        |
| 35 | 図  | (T、P-12、13N、S | (T、P-12、13N,S) |
| 44 | 12 | ピットした         | ピットとした。        |
| 46 | 2  | P L No45      | P L45          |
| 51 | 22 | 13号土括         | 13号土壤          |
| 53 | 3  | 集中地点土器        | 集中地点、土器        |
| 58 | 20 | 7号土壤土場        | 7号土壤出土         |
| 59 | 22 | 0段条条          | 0段多条           |
| 70 | 6  | 上層a 層         | 上層a式           |
| 71 | 24 | 十層I式          | 十層内I式          |
| 81 | 22 | 不整は四辺形        | 不整な四辺形         |
| 86 | 1  | 石側面           | 右側面            |

## 序

金木町教育委員会

教育長 中 谷 金 四 郎

金木郷土史に寄稿された村越潔先生は、昭和50年夏、県文化課により発掘調査された妻の神遺跡の発掘所見として、下記のように述べられている。

妻の神遺跡は、その中心時期が縄文時代後期初頭にあり、多量の十腰内工式土器が出土していること、さらにこれらの土器は長期間にわたって廃棄されたものであり、且つ発掘区の東端に住居跡やフ拉斯コ型土壙等が発掘された点より考察され、未発掘の東側平坦部にも遺構、遺物が埋蔵されているものと予察された。

当教育委員会は、これを受けて、埋蔵文化財の保存と保護行政の一環として発掘計画を立て、記録の保存と遺構の保護を図ることにし、町内に多く所在する埋蔵文化財保護行政の参考資料を得ることにしたものである。

幸い、顧問の村越先生、調査員、ならびに参加下さった方々の努力により、多大の成果を上げることができました。また発掘を快諾された地主白川忠雄氏に対しても衷心より感謝の意を表します。

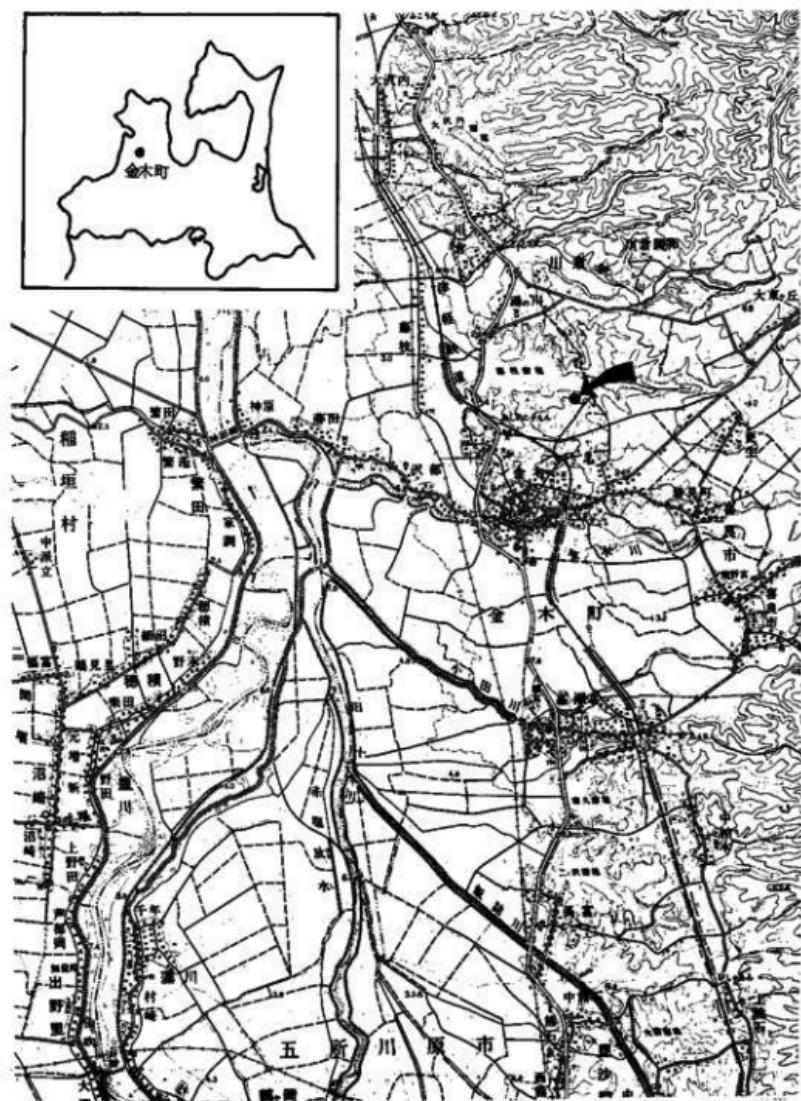
顧わくは、この報告書が町民の皆様に読まれ、当金木町の歴史の理解に役立てば幸いに思う次第である。

## 例　　言

- 1 この報告書は、金木町教育委員会が昭和51年8月6日より8月31日にわたり発掘調査した金木町妻の神1号遺跡の第二次発掘調査の内容と結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の第一次調査については、青森県教育庁文化課が調査し、報告書を刊行しているので併せて参考に供せられたい。
- 3 本報告書の作成及び編集は各調査員の討議のもとに分担執筆を行い、各項目の担当執筆に対する文責は各々の文末に記名した。
- 4 本報告書に収載した遺構の実測図のスケール、縮尺は、それぞれ明記しているが、写真は縮尺不同である。
- 5 層序の観察決定、石質の鑑別は、一貫して川村真一が担当した。
- 6 出土遺物の整理、石器の計測は、竹内正光、大橋一昭が担当した。
- 7 土器、石器の分類、写真、図版、トレース、本文の執筆等は、新谷雄藏が担当した。
- 8 出土遺物は、一括して金木町公民館が保管する。

1:50,000 地形図 NK-54-23-11  
かなぎ

(図版1,) 遺跡付近図



発掘参加者記念撮影



南より写す T<sub>1</sub>P10～T<sub>1</sub>P11実測スナップ

〔A地区遠景〕

卒T.P 7.8遠景



卒T.P 1—拡張区 若い者には負けないぞ!!



卒T.P 1—7号土壤(フラスコ型)



卒T.P 8→ チョット記念に?



卒T.P 1の実測と9、10号土壤発見



卒T.P 1の実測を実習する高校生



〔B地区遠景〕 南方より写す

竜T.P 1～拡張区



〔B地区遠景〕 北方より写す



竜T.P 1～拡張区



〔B地区遠景〕 東方より写す



竜T.P 7発掘スナップ

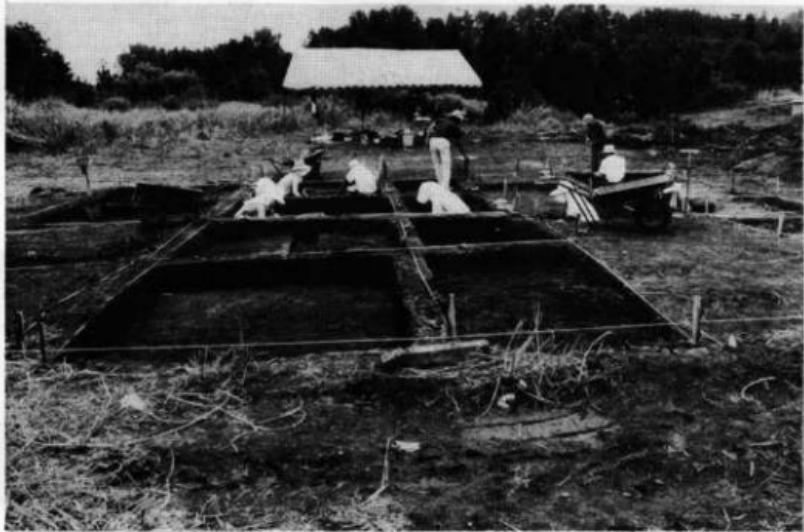
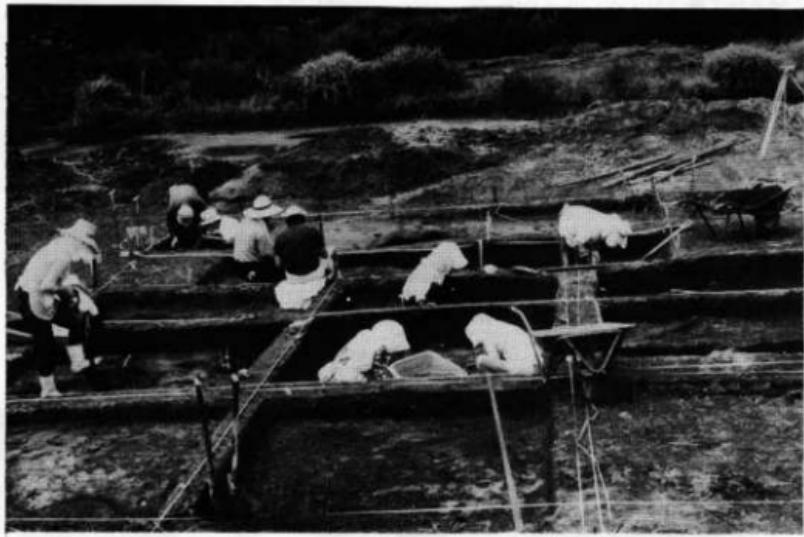


竜B地区-T.P 13の精査スナップ



〔B地区全景〕

卒東方より写す（上方よりT、P 10、11、12、13、14）



卒北方より写す（中央右下T、P 12、左13）

[B 地区]

④ 3号土壤(U字型)完掘状况



④ 2号(左下)、3号(中央)土壤(U字型)远景



④ B地区-T、P 11、13完掘状况

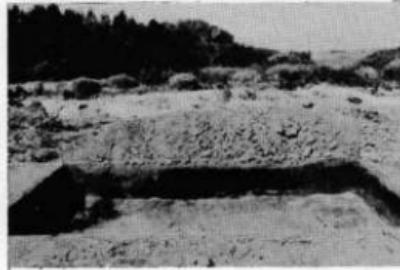


④ T、P 12、13-b 地区一炉迹检出状况、  
(右下 6号土壤)



[A 地区]

④ T、P 9 完掘状况

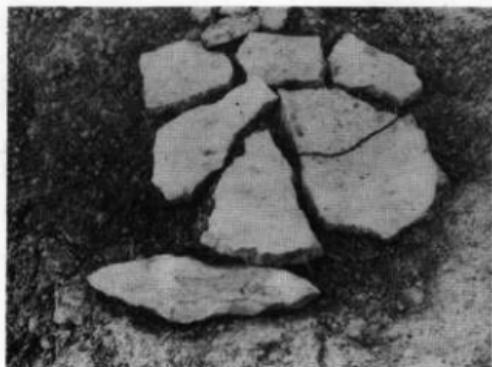


④ T、P 8 完掘状况





竪2号土壤上面Ⅱa層  
の土器出土状況  
(P.L. )

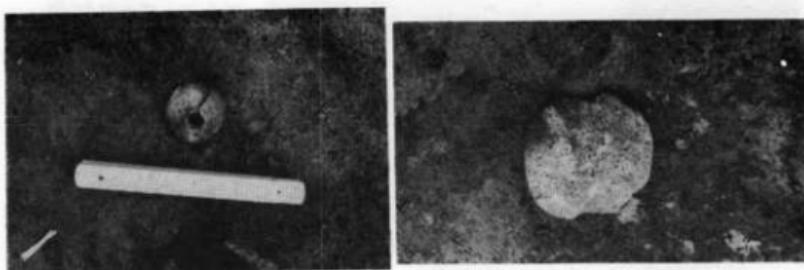


竪3号土壤上面  
Ⅱa層の土器、石槍  
出土状況  
(Point Ⅱ群a類)  
(P.L. 38-48)



竪TP13-Pit54上の  
土器出土状況  
(P.L. 7-67-73)

(遺物出土狀況)



T. P. 7-II a層  
遺物出土狀況

T、P 1 (A地区)

竪T、P 1～拡張区の発掘



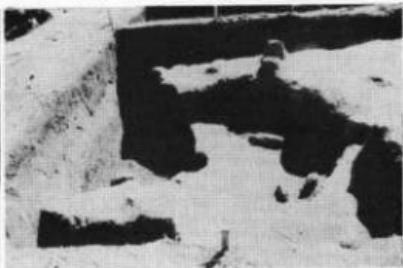
竪T、P～7号土壤



竪7、8号土壤(中央)11号(右)12号(左)



竪7～8、11、12号土壤



南方より写す（北壁セクション）

西方より写す

竪T、P 1～拡張区全景（西壁セクション）



東方より写す

## 目 次

|                  |    |
|------------------|----|
| ○序 文             | 1  |
| ○例 言             | 2  |
| ① スナップ写          | 4  |
| ② 出土状況写          | 5  |
| ○目 次             | 12 |
| I. 調査に至る経過と、調査要項 | 13 |
| (1) 調査経過         | 13 |
| (2) 調査要項         | 13 |
| II 遺跡周辺の地理的環境    | 15 |
| (1) 地 形          | 15 |
| (2) 段 丘          | 15 |
| (3) 地 質          | 16 |
| III 遺跡周辺の歴史的環境   | 18 |
| (1) 考古学上の遺跡      | 18 |
| (2) 金木町の開発について   | 20 |
| IV 発掘調査の方法と経過    | 24 |
| (1) 調査方法         | 24 |
| (2) 調査経過         | 24 |
| V 層 序            | 29 |
| 〔A地区〕            | 29 |
| 〔B地区〕            | 32 |
| 〔C地区〕            | 37 |
| VI 遺構と出土遺物       | 43 |
| (1) 土 坡          | 43 |
| 〔B地区〕            | 43 |
| 〔A地区〕            | 47 |
| 〔C地区〕            | 49 |
| (2) 住居跡          | 50 |
| (3) 柱穴群          | 51 |
| (4) 出土遺物         | 53 |
| 〔土器・土製品〕         | 53 |
| 〔石器・石製品〕         | 75 |
| VII 考 察          | 88 |

## I 調査に至る経過と調査要項

金木町教育委員会

教育次長 工 藤 栄

### (1) 調査経過

このたびの調査の対象となった“妻の神I号遺跡”は、県遺跡番号M586、金木遺跡M9として登録されている遺跡の一部で、前年度（昭和50年度）に、農免農道工事に先立って調査した東方隣接地区の原野300m<sup>2</sup>であるが、この原野の所有者である金木町大字沢部210の4白川忠雄氏から、昭和51年10月初旬に根菜類栽培のため深耕開畑する届出があつたので、同氏の承諾を得、開畑前に緊急発掘調査を実施し、同遺跡の記録保存の処置を講ずることになったものである。

したがって、このたびの調査は、妻の神I号遺跡第2次発掘調査と称することにし、7月19日(月)に金木町中央公民館で発掘調査の現地打合せを行い、8月6日(火)から発掘調査に入った。

### (2) 調査要項

#### 調査期間

昭和51年8月6日(月)～8月31日(火)

#### 遺跡所在地

青森県北津軽郡金木町大字金木声野84の650

#### 遺跡所在地所有者

青森県北津軽郡金木町大字金木字沢部210の4

白川忠雄

#### 発掘面積

220m<sup>2</sup>

#### 調査主体者及び担当者

金木町教育委員会

#### 調査参加者

顧問 村越潔 弘前大学助教授

調査員 新谷雄藏 五所川原中央小学校

川村真一 金木高等学校教諭

副調査員 熊谷充夫 金木中学校教諭

永沢秀夫 鶴田中学校教諭

岩崎繁芳 羽野木沢小学校教諭

太田文雄 森田小学校教諭  
竹内正光 金木町文化財審議委員  
大橋一昭 金木町大字川倉字七夕野  
補助員 工藤栄 金木町教育委員会  
今義孝 同上  
山口信保 同上  
黒滝京子 同上  
桑田康子 同上

## II 遺跡周辺の地理的環境

### (1) 地形(図版1)

津軽平野北東部に位置している金木町は、金木、嘉瀬、中柏木、喜良市、蒔田、神原、藤枝、川倉の各地区より構成されている。この中の金木地区は、東は津軽半島の脊梁をなす中山山脈に、西は津軽平野の中心を北流する岩木川、南および北はそれぞれ金木川、妻の神川とによって挟まれる。

妻の神遺跡は金木地区の北方藤枝溜池の南東にある。

遺跡東方の中山山脈から西方の津軽平野までの地形は、中山山脈中もっとも高い大倉岳(677m)や十二岳(540m)等の山地にはじまり、丘陵から段丘へと変化し、津軽平野低地帯となる。とくに、標高100m以下では、3段の段丘を形成し、その末端は約10mの段丘崖をもって津軽平野と接している。

妻の神遺跡は金木町(金木地区)の北、約1.5kmの藤枝溜池南東岸の段丘面上にあって、藤枝溜池をはじめ津軽平野を望むことができ、遠くには西海岸に沿って連なる屏風山砂丘を眺望できる絶景の地である。

遺跡は20~40m段丘面上にあり、この段丘は平野の東縁に沿って南北に連続して発達している。

遺跡付近の河川は、金木地区の南方を西へ流れて岩木川に注ぐ金木川と川倉南方の新川および遺跡の北を流れる妻の神川がある。後二者はいずれも西流したのち北に進路をかえ、鳥谷川に合流し、十三湖に注ぐ。

遺跡の北西に面して藤枝溜池がある。この溜池は妻の神川を塞き止めて作った農業用貯水池で、元禄時代につくられたものといわれている。周辺の地形から考えて、本遺跡で生活が営まれていた当時でも池沼状態は存在していたようで、当時もこの水を利用していたものと思われる。

### (2) 段丘

津軽平野北東部では4面の段丘がみられ、次のとおり区分、対比されている(梅津1967)

津軽平野北東部段丘対比表 (表1)

|    | 金木     | 大沢内    | 飯詰     |
|----|--------|--------|--------|
| 1面 | 80~90m | 80~90m | 80~90m |
| 2面 |        | 60m    | 60~70m |
| 3面 | 20~40m | 40~50m | 40~50m |
| 4面 | 10~15m | 15m    | 10~25m |

対比表に示したように、金木付近では第2段丘面は明瞭でない。以下に金木付近の段丘面について述べる。

〔第1段丘面〕 標高80~90m

大東ヶ丘から喜良市東方でみられ、平坦面ではなく、起状に富む。堆積物は粘土化した火山灰、シルト、礫で基盤の二本松凝灰岩層ないし、塩越泥岩層の上にのっている。

〔第3段丘面〕 標高20~40m

面の開析はあまり進んでおらず、上位面とは緩傾斜になって移行している。堆積物は灰褐色シルト、砂、礫の互層からなり、その上を黄褐色火山灰がおおっている。

この面に先土器時代の石器（尖頭器等）が出土した、金木町相野山遺跡がある。

〔第4段丘面〕 標高10~15m

面はかなり平坦で、南北方向に発達して延び、南部の長富あたりでは幅2kmにおよび、金木付近でも1kmはある。

堆積物は黄褐色シルトを主体とし、その中に3cm~10cmの厚さの数枚の粘土の薄層が挟在しており、その上を赤褐色火山灰（厚さ約1.2m）がおおっている。

この面には大沢内溜池遺跡があり、また、かって金木遺跡（凝石器）が発掘されたことがある。

この面における火山灰は3層からなる。すなわち、下位から赤褐色粘土質火山灰、褐褐色粘土質火山灰、黄褐色粘土質火山灰である。

(3) 地質

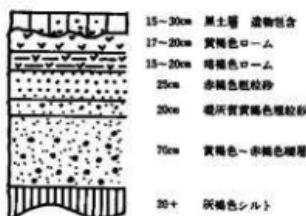
遺跡における地質の模式柱状図は図版2のとおりである。

遺物は黒土層およびローム層の削剥による黒土との混合層に含まれている。

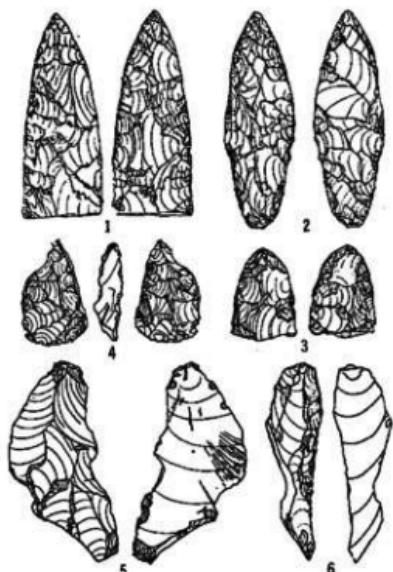
調査地域のローム層は、隣接している妻の神第一次調査区域とくらべてややうすく、とくに黄褐色均質ロームに著しい。

土壌の基盤は赤褐色粗粒砂層で、すべての土壌は赤褐色粗粒砂層ないしは赤褐色礫層まで掘り込まれている。（川村記）

〔図版2〕 遺跡地質柱状図

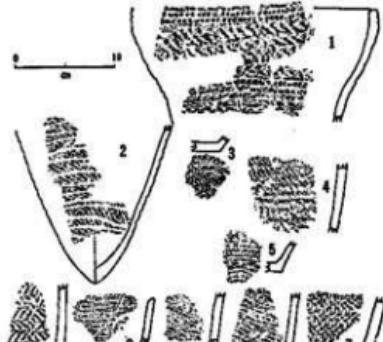


(図版3) 金木町遺跡と出土品



第3図 相野山遺跡出土石器（東日流第3号上）

1. 長径幅長さ39cm 2. 幅さ19.9cm 3. 幅径長さ82cm  
4. 幅さ 5.1cm 5. 幅さ13.8cm 6. 幅さ 13.5cm



第4図 戸野七夕野遺跡出土土器拓影



第2図 金木町戸野越周辺遺跡分布図

1. 遠ノ川
2. 川合小学校前
3. 中の島（E）
4. 中の島（B）
5. 戸野湖2号ぜめ
6. 戸野湖3号ぜめ
7. 戸野湖4号ぜめ
8. 戸野湖4号ぜめ
9. 戸野七夕野
10. 塚ノ神1号
11. 塚ノ神2号
12. 塚ノ神3号
13. 塚ノ神4号
14. ヘビ沢
15. 金木1号
16. 金木2号
17. 戸野大御堂
18. 戸野大御堂
19. 猿枝
20. 神明町



第1図 金木町遺跡分布図

1. 宇野野
2. 七夕野
3. 湯ノ川
4. 豊ノ川原地蔵
5. 塚ノ神（1）
6. 塚ノ神（2）
7. 戸野田城馬場
8. 戸野
9. 戸野松
10. 猿枝
11. 相野山（1）
12. 相野山（2）
13. 阿佐丸寺
14. 版本
15. 千葉
16. 喜多
17. 二ノ代屋地石
18. 中松木庭石
19. 五ノ代屋地
20. 全国遺跡地図一書画集一による

### III 遺跡周辺の歴史的環境 (図版3)

本遺跡の所在する金木町は歴史的にも多くの遺産を受けついでいる地域である。以下、考古学上の重要遺跡と思われるもの、歴史上の遺跡、または伝承等の一端についてふれることにする。

#### (1) 考古学上の遺跡 (第1、2図)

##### ☆ 相野山遺跡 (旧石器時代末)

この遺跡は、青森県下で発掘された数少ない旧石器時代の遺跡である。

昭和24年、名久井文明氏と金木高校生によって発見されたもので、黒褐色土下のローム層より遺物が発見されたものという。

遺物は、尖頭器、彫器、削器などから組成されており、かなりの剥片が出土している点から、当遺跡で石器を製作したと推定される生活の場であったらしい。とされている遺跡である。

##### ☆ 芦野七夕野遺跡 (縄文時代早期末～前期初頭の移行期)

この遺跡は、昭和43年金木高校郷土研究部員の手で発見され、「東日流」に記載され、且つ名久井文明氏によって中央学界に発表されている。

また、昭和46年にも、戸沢武、田村誠一、三浦圭介氏等により再度調査され、出土土器は、名久井氏によって第一群、第二群に分けられ、東北地方北部の縄文早期から前期へ移行する時期をつなぐ重要資料を出土する遺跡である。

##### ☆ 金木遺跡 (円筒下層a式、b式土器)

この遺跡は、現在付近に火葬場、ゴミ焼却場があるが、通称「ヘビ沢」より西南へ分岐する小谷の東西両斜面、及び周辺台地一帯が本遺跡である。

本遺跡からは、円筒下層a式、b式土器が出土し、またb式よりc式への移行期のものが若干含まれる。

また本遺跡の南端を東西に走る農道南側から円筒下層c式が、さらに南側りんご園からは完形の須恵器が出土している。

この台地の北端崖面には、昭和28年杉原莊介氏を団長とする発掘調査が行なわれた「金木砂礫層」が露出しており、当時の学界をにぎわせた学史を秘める地点である。

##### ☆ ヘビ沢遺跡 (十腰内I式、最花式、円筒上層b式)

この遺跡は通称「ヘビ沢」西斜面にあり、今回調査した妻の神I号遺跡とは農道を隔てて西に接する遺跡である。

遺跡の一部は、ゴミの焼却場となっているが、多数の土器、石器が露出している。なお、筆者等の所見では、円筒下層b式土器も多量に含まれている遺跡である。

#### ☆ 喜良市千苅遺跡 (大洞C式～A式)

この遺跡は、喜良市字千苅53番地、桑田重助氏所有の土地にあり、金木高擣土研究部の発見によるものである。

出土遺物は、亀ヶ岡式土器（縄文晩期）が多量に出土し、晩期中葉より後葉の遺跡である。

以上、先土器時代末より、晩期に至る代表的な遺跡について述べたが、これらは金木町内に所在する遺跡のごく一部分にすぎない。図版3、第1・2図によって現在知られている遺跡の分布を示し、その補いとしたい。

#### ☆ 弥生文化時代

わが国の歴史上では、先土器時代（旧石器）の次に縄文時代、弥生時代とつづく、弥生時代とは弥生式土器とともに金属器を使用し、稻作農耕が基本となっている。

青森県では、田舎館、垂柳などがその代表的遺跡である。

当金木町内では、現在のところ、この時代の遺物は発見されていない。

しかし、縄文時代終末の土器と、田舎館式土器の中間につなぐ土器片が、妻の神遺跡の第一次調査において出土している。この土器片は、北海道の恵山式土器と併行するものと思われるが、伴出土器がないため詳細は不明である。（統縄文式土器）

#### ☆ 土師器、須恵器使用の時代

青森県内には、土師器、須恵器を出土する遺跡が約350か所以上あると言われている。

当金木町においても約20か所以上に達するらしい。土師器は、東北北部では、大きく二型式に分けられ、さらに一型式が三つぐらいに細分されるようである。

古い方の第一型式には須恵器は伴わず、第二型式に須恵器が伴出する。

当町内では、白山堂遺跡があり、土師器と須恵器が伴出している。

当町と隣接する五所川原市では、須恵器の北限の窯跡が発見され、調査者の立正大学坂詰秀一氏によると、これらの窯跡は、平安時代末期か鎌倉時代前半期のものとされている。

当金木町内より出土する須恵器の器形、施文、テクニックより見て、ほぼ同時期のものと考えられる。

また当町内東辺部丘陵地には、製鉄跡も発見されている。発掘された製鉄跡（タタラ）は、前に述べた七夕野遺跡発掘の際、隣接して発見されたものをあげることができる。

さらに、川倉小学校校庭付近より出土した、擦文土器は、当地方では、出土例が極めて少ないものである。

今日の金木町は、古代から中世へかけて十三ヶと津軽地方内陸部を結ぶ重要な位置にある。したがって十三ヶ経由の文化の大半はこの地を中継所とすることは疑う余地がない、町内に現存する須恵器、土師器出土の遺跡を克明に調査することによりこの地方の耕作農耕開始の時期をはじめ、古代より中世にいたる物質文化の大要が解明されるものと思われる。それは単に金木町のみならず津軽地方の歴史解明に役立つ点が大きいのである。

(金木町史、村越潔氏の論文より、一部分新谷記)

## (2) 金木町の開発について

この項では、金木町の開発について文献により探りながら当遺跡をとりまく歴史的環境の一端にふれてみたい。

当遺跡の北西に所在する藤枝溜池は、その周辺に多くの遺跡を持つ一大遺跡群である。

この溜池は、後述するように江戸時代における新田開発の進行とともに築造されたものであり、本来の地形は中山山脈から西に伸びる丘陵の縁辺、妻の神川の両岸ということになる。

また、行政区画から見ると、妻の神川、藤枝溜池の南岸一帯は、金木町大字金木字芦野に、大東ヶ丘を含む北岸は金木町大字川倉字七夕野に属している。

金木町開発の歴史について文献を見ると、天文年間（16世紀前半）に編まれた、「津軽郡中名字」には、原子（五所川原）から十三ヶ（市浦村）にかけての地名が列記されているが、その中に金木、川倉の名は見られない。

しかし金木には近世初頭までこの地方に力をおよぼした浪岡北畠氏系の武将、金木彈正の居城、「金木城」があったと伝えられる。

また天正年間（16世紀後半）には、大浦（津軽）為信の飯積城（高橋城）攻撃に協力した対馬右衛門太郎が館を構え、この地方を開発したといわれる。

津軽藩の新田開発事業は17世紀後半急速に展開する。慶安年中（17世紀中頃）の「御郡中絵図」には、喜良市、小田川のほか金木、藤田などの村名が見えてくる。

藤枝溜池の北側にある川倉村は、寛文4年（1664）の「陸奥国津軽郡高辻村々隣」に『高武百石拾石五斗』と記され、創村の時期はそれ以前、明暦、万治ごろまで遡るものと推定される。

その後寛文11年（1671）には川倉地域の水貯き工事が計画されて翌年着工、このとき妻の神川の改修工事も行われている。

遺跡の付近にあった妻の神村は、貞享元年（1684）に金木庄村屋が藩庁に提出した書上帳、および添図に金木村の支村として現われており、同年の他の史料には、妻の神川の流域に入役の田が開かれていたことを記している。（金木郷土史所収）しかしこの村は元様の絵図に見られないで長続きしなかったものと考えられる。

金木新田の開発が藩の手によって実施されたのは元禄11年（1698）のこと、宝永2年（1705）

05)に成就した。工事の進展に伴い藤枝溜池の建設も進められ、元禄年中には完成しただろうと推定されている。

岩木川下流域の開発が進行するにつれて、金木はこの地域の中心地となっていました。

金木川口御番所が設けられたのが天和3年(1683)、貞享4年(1687)には、それまで属していた下の切遣が分割されて金木組が誕生し、御代官所の所在地となった。さらに元禄4年(1691)には藩の御蔵も造られて、政治、経済上の重要度を加えていった。

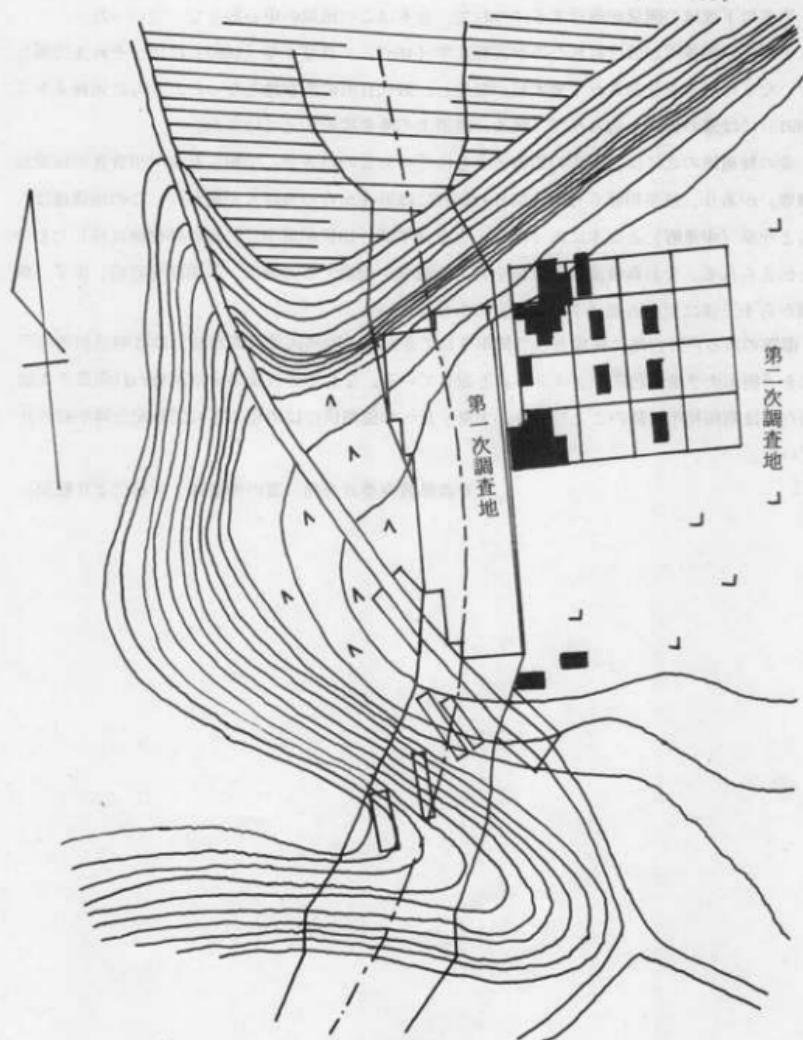
妻の神遺跡の北には、下北の恐山とともに『いたこの口寄せ』で知られる『川倉賽の河原地蔵尊』があり、毎年旧暦6月23、24日の祭礼には近在からの参詣者で賑わう。この地蔵尊は、もと今泉(中里町)と金木にあったものを亨保年間(18世紀前半)に妻の神村跡に移したものと伝えられる。なお藤枝溜池の東部を経て地蔵堂を通過する道路は、新田開発以前、原子、飯積から十三瀬に至る古道『下の切道』にあたるという。

遺跡のある芦野台地は稼場として使用されてきた。「陸奥国津軽郡村誌」には明治初年の芦野を『樹木ナク唯草色茫々クルノミ』と記している。なおこの台地の分割が行われ開墾され始めたのは昭和初年以降のことであり、大東ヶ丘への道路横には昭和7年の開墾記念碑が残されている。

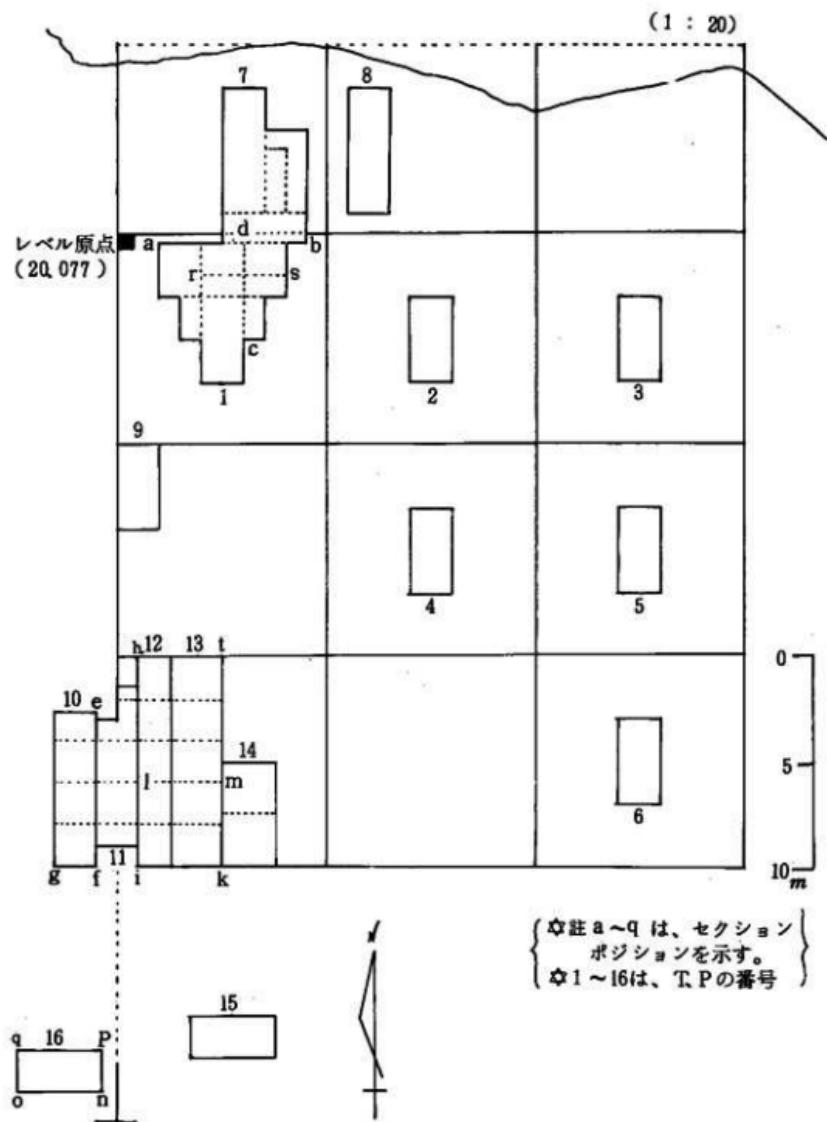
(青森県教育委員会刊 妻の神遺跡、佐藤仁より転記)

(図版4) グリット、T、P配置図

(1 : 100)



(図版5) グリット、T.P.、セクションポジション配置図



## IV 発掘調査の方法と経過

### (1) 調査方法

第二次調査の発掘区は、南北に約73m、東西に約45mの広さを持っており、第一次調査地の東側に隣接するほぼ平坦地である。

この平坦地に、第一次調査の際設定したレベル原点(20,077m)を基点とし、南北に40m、東西に40mの基本杭を打ち、1辺10m×10mのグリットを組み、さらに各グリットの中央に、東西2m、南北4mのテストピットを組み込むことにした。

即ち、テストピットにより各グリットの状況を観察し、その結果によって遺構、遺物の所在するテストピットを拡張し、後にグリット方式に切替える方法を採用した。

グリットは、16グリットとしたが、図版4.5に示すように、テストピットを配置し、発掘区全体の状況を捉えられるよう配置した。

さらに、発掘の進捗に伴い、発掘面の性格が明らかになった時点で、A地区(T.P1~9)、B地区(T.P10~14)、C地区(T.P15~16)、の三地区に分けることにした。

### (2) 調査の経過

この項では、調査の経過、および遺物、遺構の顕著であったテストピット(T.Pと略記する)を中心として、その要約のみを簡単に述べることにする。

●昭和51年7月19日㈪、関係各機関の町役場職員、担当者、調査員、副調査員、ならびに地主の方々による発掘調査打合わせ会議を開催し、調査地点および調査方法の検討を行ない、8月6日より調査に入ることにする。

●8月6日、草木の刈払いを行ない、基線を南北、東西にとり、グリットの割り付けと各グリット内にT.P1~6、8を設定するとともに、直ちに表土の剥ぎ取りにかかる。

#### 〔A地区〕

●T.P1~6、8の表土剥ぎ取り終了後、検討を加え、T.P2、3、4、5、6、は、表土下がローム層のため、放棄する。(8月11日)

T.P1は、表土の剥ぎ取りでは確認できなかったが約5cm IIaを掘り下げることにする。遺物(土器片)の混入をIIa層に認めたためである。

●T.P9を設定、発掘するも一部擾乱ありベースまで掘り下げ放棄する。

そのため「A地区」では、T.P1、T.P8の2か所の発掘を続行することにする。T.P1およびその拡張区において遺構(7号~12号)の落込みを発見したため発掘を8月21日まで続行する。(図版8)

T.P 8は、V字状の凹地にあり、包含層は厚いが、遺物の出土状況が正常でなく、層序も上層において乱れていた。後世においてこの凹地に削平した土を投入したものと思われる。

● 8月8日、新しく、T.P10~15を設定、表土の剥ぎ取りを行なう、T.P10において、遺構を発見、T.P11、T.P12、にまたがるものと観察された。そのためT.P13~14まで拡張し、表土を剥ぎ取り精査する。

その結果、T.P10~13までに遺構、住居址、柱穴が連続することを確認した。

すなわち、第1号~第6号土塙、住居跡、および柱穴群である。(図版6、7)

なおT.P10~T.P11までは、2m(東西)×10m(南北)、T.P12は1.5m×10m、T.P13~14は2.5m×10mとした。

さらに、南より北へ2mずつa区~e区とする。

T.P12~13のb区、e区の一部は後世の擾乱が見られ多量の木炭が北西より南東に帶状に堆積していたので、サブトレーナーを入れ後放棄した。

T.P14は、a区、b区の表土を剥ぎ取り、ローム層がその下にあったので掘り下げは中止する。

このT.P10~13にわたる地点は、土器、石器の出土量が少なく、遺構群であるため、B地区として後に述べることにする。

T.P15は、南北2m、東西4mにとり設定した。表土がうすく、第2層(IIa層)は極めて固い、遺物はかなり濃密であるが出土状況が悪い。

● 8月16日、発掘作業の中心は、A地区では、T.P1、T.P8、B地区では、T.P10~13である。

● T.P15の遺物出土状況は擾乱気味である。しかし出土遺物の中に混在する土器型式が、A地区、B地区と異なるように観察されたため、T.P16を新しく設定した。このT.P16は、発掘予定区の南端であり、且つ第一次発掘区の接点までの斜面に設けたものである。

このT.P15~16を合わせてC地区とした。さらに第一層を剥ぎ取った段階で掘り下げを一旦中止したT.P7の掘り下げにも着取する。

T.P7は、T.P8の西側に、東西2m、南北4mとして設定したものである。T.P8は、前に述べたようにV字状にクボム地形の中央に設定し、T.P7は、凹地の立上がりに設定したものである。遺物は1b、IIa層に群集して出土し、その出土状況は、B、C地区と異なっていた。そのことについては後述する。なおT.P1とT.P7は拡張区の設定によって連結したものである。

● 8月19日より後半はT.P7、T.P16へ主力をおき発掘作業を進めることにした。

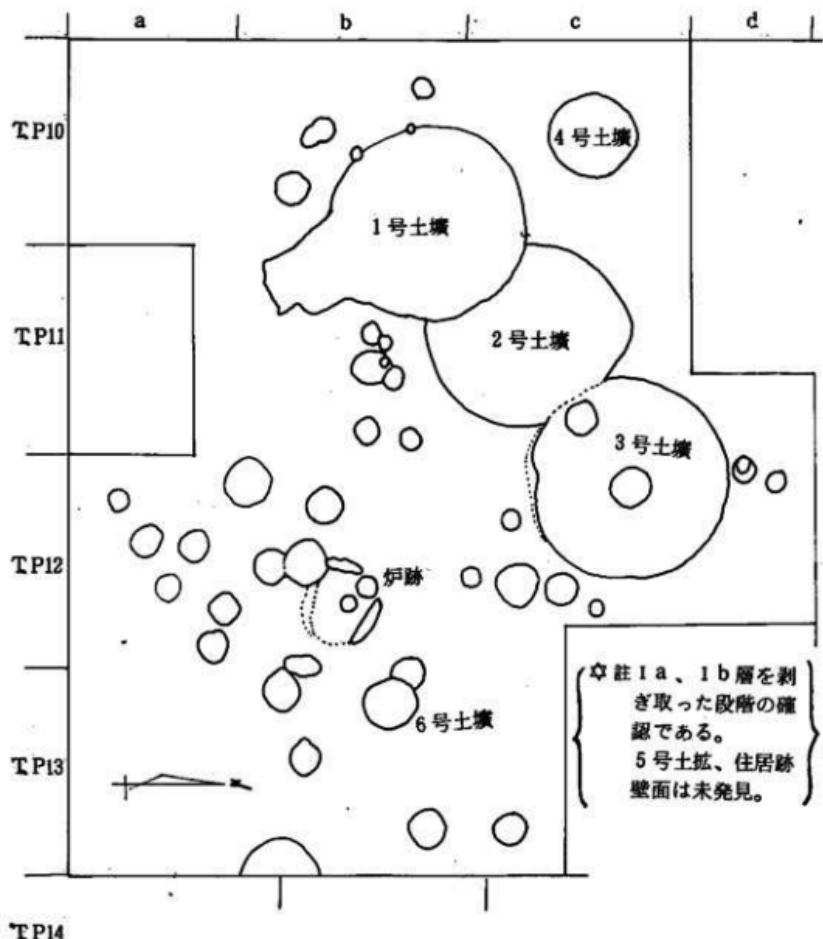
すなわち、遺構、遺物の検出されたA地区→T.P1、T.P7、T.P8、遺構群が検出され、

遺物が少ないB地区→T.P10~14、およびA地区、B地区と土器型式が異なり且つ性格が異なる土墳を有するC地区→T.P15、T.P16、の三地区を精査、検討して、後半の作業を終了したのが8月31日であった。

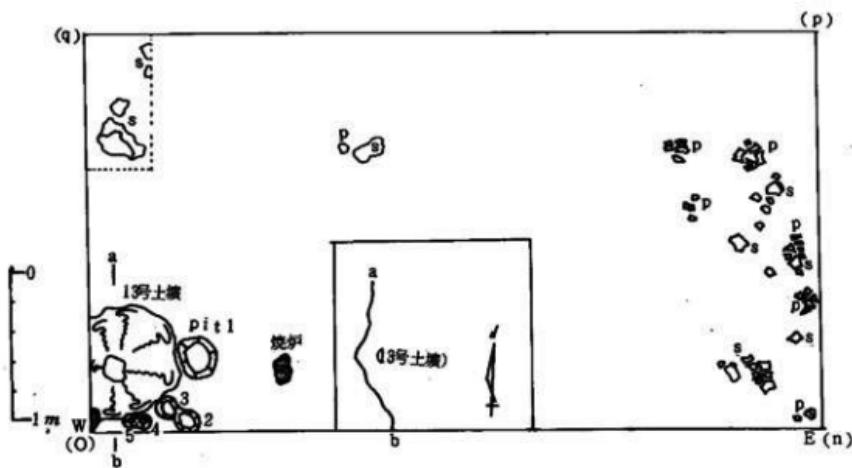
(新谷、熊谷記)

(図版 6) B 地区 (T.P 10~13) 遺構配置図

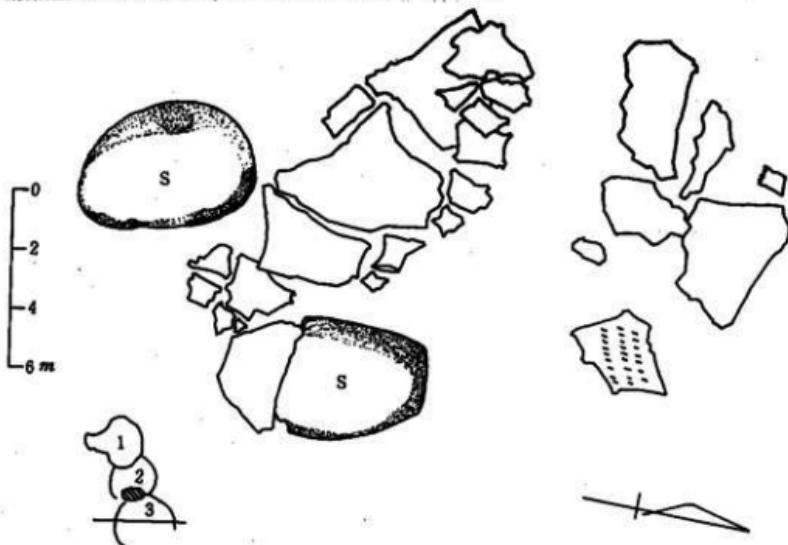
(1 : 40)



(微細図2) T.P 16—遺物、遺構配置図 (1 : 20)



(微細図1) 第2号土壤出土土器、出土状況 (1 : 2)



## V 層序 (セクション図、No.1~13)

発掘区とした農免農道東側台地は、III、歴史的環境の項でふれたように昭和初期において開墾されたものである。本遺跡の付近は当初耕作として利用されて来たと言われ、その後幾度か削平を受けたことが、発掘所見によても明らかである。

地形は平坦面をなすが、微視的に観察すると、遺跡の北側崖面に近づくにつれ、10~25cm低くなり、A地区では、凹地がT.P.8の位置にV字状にあり、中央部のB地区は東より西へや、傾斜を持っている。表土、黒土層はそのために東部程うすくなっている。

また南側のC地区は、B地区より約25~30cm程度低く、北より南へや、傾斜し、B地区的南端T.P.16付近は、東より西へ中程度（約10°）の傾斜を持っている。このC地区も、表土、黒土層は東側がうすく、西に厚い傾斜を持っている。

前に述べたように、昭和初期以降の削平、その他の土地利用、および後述する遺跡の性格から出土遺物を層位的に把握することが不可能であったが、遺物包含層は、第I層（Ia, I b）、第II層（IIa, IIa'）を中心とし、IIb層、および第III層（IIIa, IIIb）の一部には、例外的に若干の遺物を含む地点も存在したが原則的には包含しない。

以下、本遺跡における基本層序を示し、その区分に従って、各地区のセクションを掲げることにする。

(川村、新谷)

### ☆本遺跡の基本層序

遺跡のセクションを作成するため次のとおり層区分を行った。下に示す層序が本遺跡の基本層序である。

表土、盛土

|                |        |                               |
|----------------|--------|-------------------------------|
| I層（黒土層）遺物を含む   | I a層   | 黒土                            |
|                | I b層   | 黒土攪乱層 ロームブロック、淡かっ色ロームが入りこんでいる |
| II層（ローム、黒土混合層） | II a層  | ローム、黒土混合層                     |
|                | IIa'層  | 黄褐色ローム点在                      |
| III層（黄褐色ローム層）  | II b層  | 淡黄色砂質黒土ローム混合、遺物含まず            |
|                | III a層 | 褐色粘土質ローム                      |
|                | III b層 | 暗褐色粘土質ローム                     |

## IV 層（赤褐色粗粒砂層）

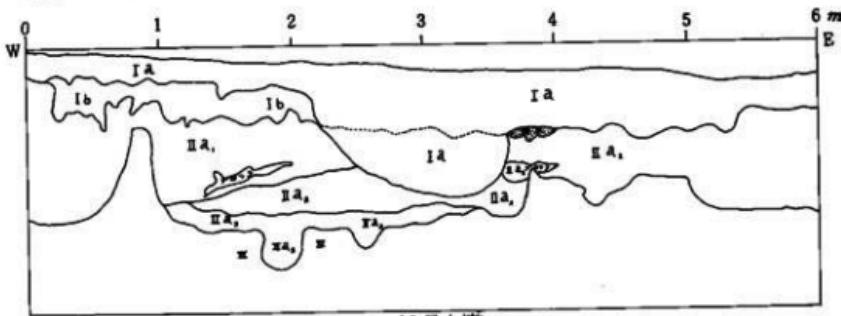
[A地区] (セクション図No.1, 2)

A地区では、T.P 1の北壁6m、および同じくT.P 1擴張区の西壁4.5mをセクションポジションに設定し作図した。

北壁セクションには、8号土壠の東西エレベーション、西壁セクションには、9号、10号土壠の南北エレベーションが含まれている。

また、図版5.は、セクションポジションをa～b、c～d等で示している。(以下も同様に示す)

(T.P 1 - 北壁セクション) No.1 (a～b)



T.P-1 北壁

(8号土壠)

Ia層 黒色の黒土層でしまりがある。中に根毛多数。遺物を包含するが攪乱がひどく破碎され細くなっている。

Ib層 淡黒色の黒土層で砂を少量混入している。2mm～3mmの木炭粒および土器片が少し含まれる。

IIa<sub>1</sub>層 黒土・ローム混合層で褐色をおび、ややかたい。中にIb層のブロックを含む。このブロックは黒色をおびており、直径1～5mmの細かな木炭粒を含む。

IIa<sub>2</sub>層 黒土・ロームの混合層で砂粒を含みややわらかい。3～10mmの木炭を含む。

IIa<sub>3</sub>層 黒土・ロームの混合層で下部に黑色粒状の木炭を含む。

III層 明瞭でなかつた。

IV層 黄褐色粗粒砂層。

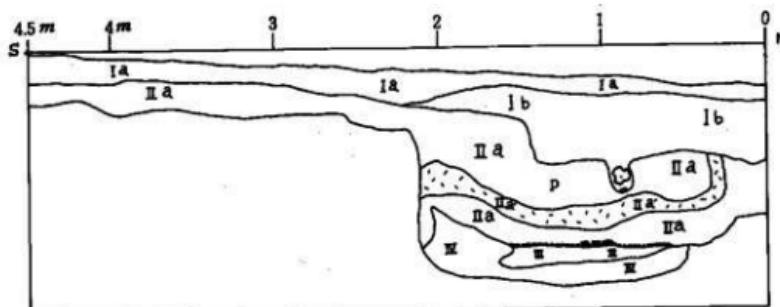
#### ☆A地区層序の所見 (No.1、No.2)

(No.1) の北壁セクションは、8号土壠のセクションを含んでおり、IIa<sub>1</sub>、IIa<sub>2</sub>、IIa<sub>3</sub>、が、同一層であるのに、砂粒、木炭粒等の混入の多少により、かなり明瞭に区分できた。またIII層は不明で区別できなかったものである。おそらくIIa層との混合によるものと観察される。すなわち、8号土壠の構築等による人為的原因によって、攪乱された結果によるものと推察される。

(No.2) の擴張区西壁セクションは、9、10号土壠のほぼ中央に南北に設定したベルトのセ

[TP 1 - 西壁セクション]

No 2 (c ~ d)



TP 1 - 西壁セクション

9号土壤 (上)

10号土壤 (下)

- Ia 層 均質な黒土層で遺物を含む。植物根毛多数
- Ib 層 黒土層で小土括中のおちこみに注口土器のほぼ完形品が存在していた。
- IIa 層 黒土・ローム混合層黄褐色で砂質ロールの感がある。IIa'から下方のこの層はしまりが少なく、やけている感じの部分もある。最下部に土器片が存在した。
- IIa' 層 本質的にはIIaと同じであるが木炭粒が多数混在し、土器片を含むのでIIaとした。
- III 層 黄褐色ローム層、上部に5~10mmの礫が存在しているが、これはIV層のものでIV層との間に攪乱し、混合が行われている。
- IV 層 赤褐色粗粒砂層

クションである。

Ia層は、きわめてノーマルな状態を示すが、Ib層には、小Pit（ピット）が袋状に落込んでおり、このPit内より、写4に掲示した注口土器（十腰内工式）が単独で出土した。

また、IIa'内は、多量に木炭粒を含んでおり、土塗状の断面を見せているが、塗底と確認される床面は検出されないものであるが、なんらかの人為によるものと考えられる。

9号土塙の塗底とした、下段のIIa層下端には、木灰とともに、第三群土器（楕円式）の出土があり、この土器は二次的に焼けている。

さらに、IV層に掘り込んだ10号土括が断面を見せている。

この、T.P 1、8、9のA地区の一部は凹状の地形を呈し、第IV層は他に比して深い。そのため土塙も、地表下深くに所在する。

また、第I層は、第七群土器（十腰内工式）、IIa'層は、それより古く、下段のIIa層は、中期末である。このように、少なくとも、三時期以上にわたった人間活動を予測することが可能である。

## [B 地区] (図版5.セクション図No.3、4、5、6、7、8、9)

B地区は、前に述べたように、第1号～6号土塙、および、住居跡、柱穴群、(図版6.7)を検出したため、No.3 (e-f)、No.4 (f-g)、No.5 (e-f)、No.6 (h-i)、No.7 (j-k)、No.8、9 (l-m)をセクションポジションとして作図した。

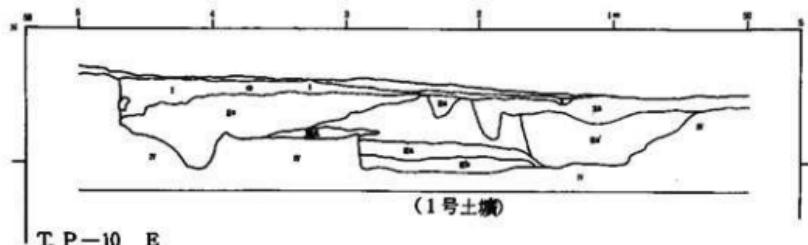
以下、これらのポジションに設定したセクションについて順に示すことにする。

### (T.P10-東壁セクション) No.3 (e-f)

図版5に示すようにT.P10の東壁 (e-f) のセクション図である。

このセクション図、No.3のb、c区には、第1号土塙のセクションが含まれている。このb区のIII a層には十腰内工式の土器片、III b層下端、すなわちI号土塙床面には、拓影1.2、P.L 1-1～7、の十腰内工式土器片が出土した。

### (T.P10-東壁セクション) No.3 (e-f)



I 層 黒土層、北側は厚いが、南側ほど薄い。(表土はぎとりのためと思われる) 北側に遺物若干あり。

II 層 (黒土・ローム混合層)

IIa 層 やわらかいローム質黒色土で暗褐色を帯びていて、遺物を含んでいたこととでIIaとした。

IIa' 層 遺物を含むのはIIa層と同様であるが、黄褐色ロームの点在で全体的に黄褐色を帯びておりIIa層の暗褐色とは区別できるのでIIa'とした。

IIb 層 上部は暗褐色であるが、下部は黄褐色となる有機炭質物が混入。

III 層 ロームの小ブロックの集まりのよう二次的堆積物と考えられるが全体として粘土質褐色ロームである。

IIIa 層 黄褐色 hard loam

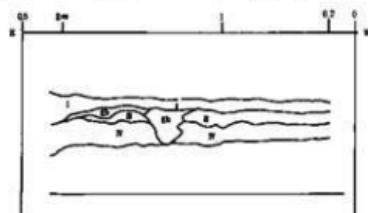
IIIb 層 暗褐色粘土質 hard loam

IV 層 赤褐色粗粒砂層

### (T.P10-南壁セクション) No.4 (f-g)

No.4は、No.3と直交するセクションである。第I層には十腰内工式土器の小片を含むが、他

[T.P10-南壁セクション] №4 (f~g)



T.P-10 S

- I 層 黒土層遺物片若干含む。
- II b 層 黒土・暗褐色ロームの混合層で遺物を含まないためII b 層とした。
- III 層 黄褐色ローム層
- IV 層 赤褐色粗粒砂層

の層は無遺物層である。このセクションには壁面にIV層に達する柱穴状のPitを認めるが第1号土塙に関連するPitと思われる。

(T.P11-西壁セクション) №5 (e~f)

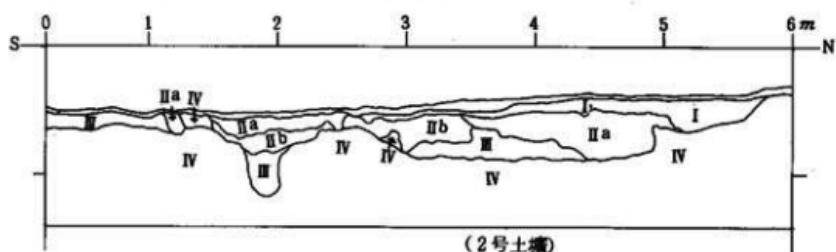
No.5は、T.P11の西壁、すなわちT.P10の東壁(№3)と表裏をなす同一ベルトの両面をあらわすものである。

このセクションには、図版7に示すPit No.17および、第2号土塙のセクションを、a、b、c区に含んでいる。

また、C区のIIa層には、「微細図I」、拓影8~18、アーエ、P.L 2-8~15に示す第一群土器円筒下層d<sub>2</sub>式土器片が含まれていた。

(T.P11-西壁セクション)

№5 (e~f)



T.P-11西壁

I 層 黒土層、淡黒色である。

II 層 (黒土・ローム混合層)

IIa 層 淡褐色ローム質で遺物を包含する。

IIb 層 淡褐色ローム質であるが、遺物を包含しないことと、下部の方がやや淡黄色を帯びて砂質となっていることでIIaと区別した。

III 層 (粘土質ローム)

二次的堆積物のようであるが、ロームであるので一応III層とした。

IV 層 赤褐色粗粒砂層

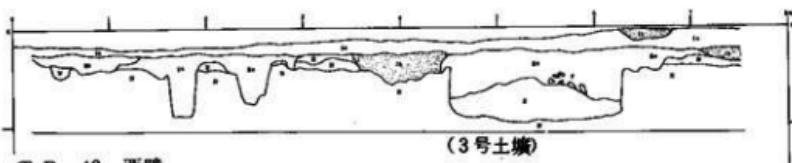
(T.P12—西壁セクション) No.6 (h-i)

No.6は、T.P12の西壁セクションである。このセクションには、図版7に示すPitNo30、64、および、第3号土塙のほぼ中央部におけるセクションが含まれている。

なお、PitNo30内には、拓影3~7、P.L7-67~75に示す、網代文の施文された底部破片、および胸部破片が出土した。この土器片は縄文時代中期、第三~六群土器とした大木8~9式（中の平II~III式）破片と見られる。

また、c区、d区にまたがるU字型3号土塙内IIa層下端より、第一群土器、円筒下層ds式土器（拓影19~27、P.L2-16~29）が出土し、さらにP.LNo48、62、に示した打製石槍、石棒破片が出土した。

(T.P12—西壁セクション) No.6 (h-i)



T.P12 西壁

I層（黒土層）

Ia 近年になってから表面がはがれているため南側の黒土はうすくローム質のものとなっている。また、整地のとき混入したと思われるローム、砂の混合ブロックが北側にある。

Ib 黒土搅乱層で全体的に暗褐色を呈し、径5cmぐらいのロームのブロック、木炭などが混入している。この中でとくに木炭が多い。黒土の下にU型に存在しているのでIaと区別し、Ibとした。

II層（ローム・黒土混合層）

IIa 全体的に暗褐色であるが、Ibより淡色である。基盤の砂層やロームに近い部分ほど淡色である。南側は褐色をしてIIbに近いが、ピット下部に土器片など遺物を多数含むため、IIaとした。

III層（ローム層）

黄褐色ローム層であるが、U字型ピット中のIII層はローム質を示しているもののやわらかく不均一で二次的堆積層と考えられる。

IV層 遺跡の基盤をなしているもので赤褐色粗粒砂層である。

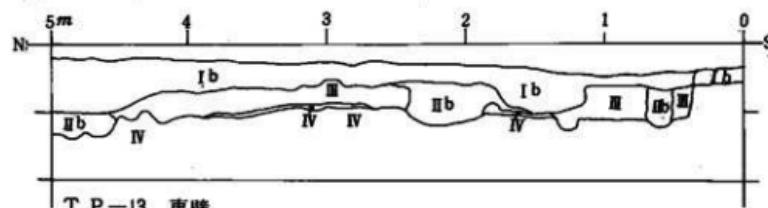
(T.P13—東壁セクション) No.7 (J-K)

このNo.7は、T.P13の東壁、すなわちB地区の東端に南北に設定した壁面のセクションである。

表土（Ia層）は削平されてなくなっている。包含層のIb層は、他に比してうすく、IIa層はない。また、IIb、III層が入り乱れており、遺物はごく少ない。

壁面に柱穴と思われる小ビットが見られるが後述する住居址と関連が予察されるが断定は控えたい。

[T.P 13—東壁セクション] No.7 (j ~k)



T.P-13 東壁

I b 層 黒土層の中に径が1~5 cmのロームのブロックおよびレンズ状ブロック（厚さ4 cm、径20 cm）混入。

II b 層 ローム・黒土の混合層で上位の方が顯著で暗褐色を示す。

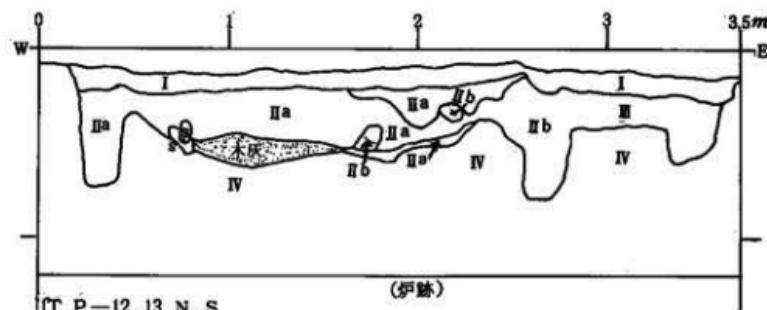
III 層 黄褐色ローム

IV 層 赤褐色粗粒砂層

(T.P 12~13—南壁セクション) No.8 (i ~m)

No.3、5~7までは、東、西壁セクションであるが、No.8、9は、南、北壁セクションである。図版5.に示す1-mの同一ベルトの南、北壁をポジションとして作図した。No.8はそのうちの南壁セクションである。

T.P 12~13—南壁セクション] No.8 (i ~m)



T.P-12, 13 N.S.

(木灰)

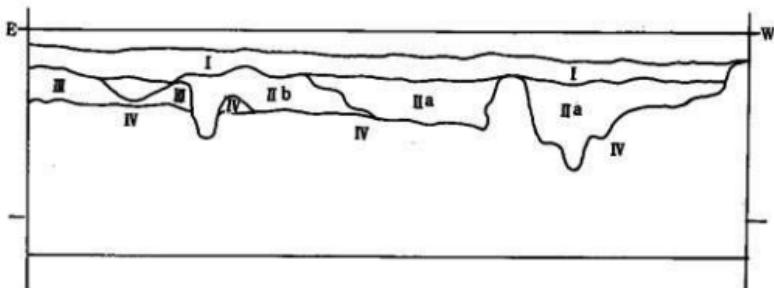
I 層 黒土層

II a 層 灰褐色を呈しており、ローム黒土混合層、この中にII bのブロックが点在、土器片を含む、下部にレンズ状（厚さ15 cm、径80 cm）に木灰がある。

III 層 黄褐色ローム層、東側にはっきりしている。

IV 層 赤褐色粗粒砂層

(T.P12-13-北壁セクション) No.9 (i~m)



このセクションには、Pit No.33、56、57の一部と石囲い炉のセクションが含まれており、且つ炉址内の木灰層もその断面を見せているものである。石囲い炉はIIa層下にあり、IV層上面に達し、IIa層、IIb層は、乱れており、ブロック状を呈していた。炉跡は、南側、東側の一部が破かいされ、Pitが西、東にある。このPitは、炉跡より後世のものと見られる。これらのPitによって、炉跡は、破かいされたものと観察される。

(T.P12-13-北壁セクション) No.9 (1-m)

上に示した、No.9は、No.8と同一ベルトの北側の壁面をセクションポジションとして作図したものである。そのため対比しやすいようにまとめて掲げた。

このNo.9の東側IIb層を掘り込んでIV層に達するPitは、No.8のIIb層よりIV層に達するPit No.56であり（図版7）、西側のIIa層よりIV層に掘り込んだPitは、石囲い炉の中に位置するPit No.34である。

さらにブロック状のIV層は、IIb層が混入していたので区別して示した。

#### ☆B地区層序所見 (No.3~No.9)

B地区全体を、(No.3~9)のセクションで概観すると、b、c区は、a区に比して遺物包含層がや、厚いように見られる。また、土壤も、b、c区に所在する。

a区は、若干の削平を受け、東にすすむ程、Ia層はなくなるようである。

B区は、遺物の出土量も少なく、第IV層とした粗粒砂層上面は、第一、第三~六、第七群土器の三期にわたっての生活面と考えられる。

A地区、B地区とも、三時期の土器が混在するのがこの遺跡の特徴と思われる。

[C地区] (セクション図、No10、11、12)

C地区は、T.P15、T.P16の2か所を発掘したのであるが、前述のとおり、T.P15の層序が擾乱気味のため、T.P16の南壁(n-o)→No10、東壁(n-p)→No11、西壁(q-o)→No12、をセクションポジションとして設定した。(図版5)

このT.P16の北側は、第一次調査の盛土、その他によって擾乱を受けており、また他の壁面も削平を受けている。

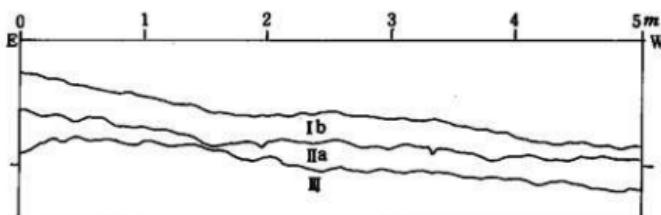
(T.P16-南壁セクション) No10 (n-o)

No10とした図は、T.P16の南壁セクションである。第I層の1a層は存在せず、1b層が表土となっており、その1b層上面は乱れて擾乱の様相を呈している。

遺物は、I層、IIa層に含まれており、前期、中期、後期のものが混在し、中期末(楕円式~大木10式)の土器片が多い。

層序は、東より西へ地形の傾斜と同様傾斜しており、IIa層は擾乱気味でありソフトである。

(T.P16-南壁セクション) No10 (n-o)



第I層……Ia層は、No10~12とも存在せず削平されたものと思われ、Ib層より遺物を含む。

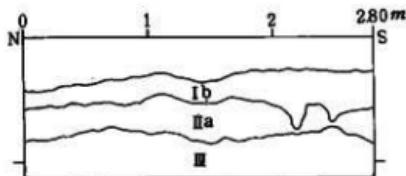
第II層……IIa層は遺物の出土多く、ほぼ正常なるも、包含する遺物は、各期混入である。No12の南端には、IIa層より、III層に掘り込んだ土塗、13号土塗の一部を見せる。

第III層……IV層を掘り込んで、焼土が南端に見られ、木灰の堆積があり、炉跡と思われる。

(T.P16-東壁セクション) No11 (n-p)

No11 (n-p)は、わりに正常な層序を示していた。Ia層は削平されてなく、Ib層が上層となっており、IIa層は正常と認められる。この東側壁近くに土器片、礫群が密集して廃棄場の様相を示していた。(微細図II)

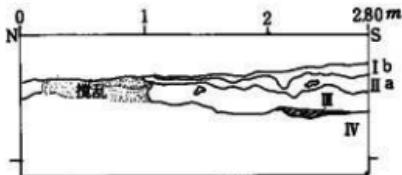
(T, P16—東壁セクション) No11 (n~o)



(T, P16—西壁セクション) No12 (q~o)

このNo12 (q~o) セクションの北側は擾乱を受けており南側には、III層を掘り込んだ第13号土塙があって、ほぼ完形の深鉢形土器（大木10式併行期）が斜位の状態で土塙内より出土した。(P.L76, 写5) なおこのセクション北側は、I a、I b層は削平されて存在しない。また南端近くに炉跡を認める。（微細図II）

(T, P16—西壁セクション) No12 (q~o)



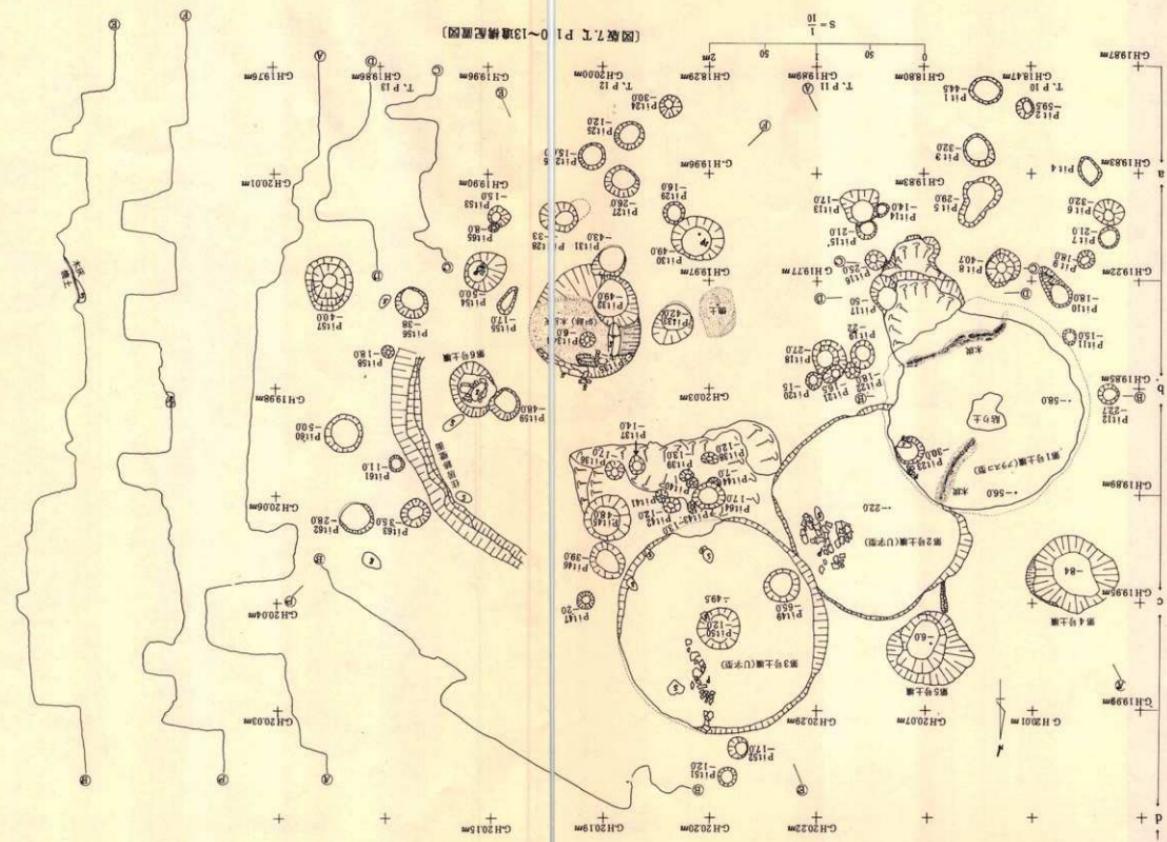
#### ☆C地区層序所見 (No10~12)

セクション図No10~12、を中心にC地区序層を概観すると、地形が東より西へ傾斜しているため、I層~IV層が西へ傾斜し、次第に厚くなるように見られる。

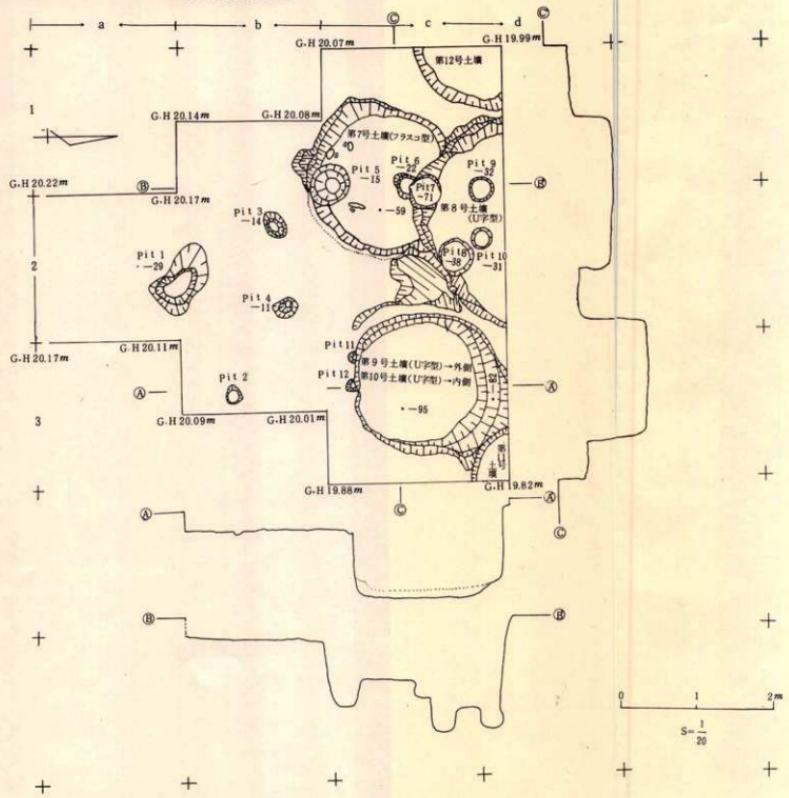
特にIII層としたローム層は厚くなり、IV層は、この地点より南西へす、むにつれて次第に消滅するよう観察された。

遺物（土器）の出土状況は、十腰内工式、中期a式、櫛林式が、I b、II a層に混在して出土する。しかし、第六群とした大木10式が多いのがこの地区的特徴である。

（川村、新谷）



(図版8 T、P1及び拡張区遺構配置図)



## VI 造構と出土遺物

### (1) 土 坑

本遺跡の調査で検出した土坑は計13個である。そのうちわけは、A地区6個、B地区6個、C地区1個の計13個である。

そのうち完掘して調査したのは、A地区3、B地区6、C地区1、計10個で、A地区的3個は一部完掘である。

これらの土坑は、形状から5類に、伴出した土器型式から三時期に大別される。

以下に各土坑の概要を述べ、文末に分類して掲げることにする。なお、土坑番号は発見順序によるものである。

[B地区] …註（B地区は、T.P10~14で構成される）

☆1号土坑、（図版6、7、セクション図版3、写2）…（フラスコ型）

1号土坑は、T.P10、11のb区、C区にわたりIIa層下端において確認できたものである。確認は第一次発掘調査における経験が役立った。それはこの遺跡における地層の辨別に頼っていた為、早く確認できたのが幸いした。

この土坑は、2号土坑と、T.P11-b区-IIa層下で切り合い、2号土坑の一部を切り取って構築されている。

平面プランは、フラスコ状であり、且つエレベーションもまた、フラスコ状を呈するものである。

計測値は、長径265cm（入口部約85cmを含む）。円形部上縁で、短径182~175cm、深さは確認面より45~58cmである。

入口部を除くと円形プランをなし底径は、最大径195~190cmを計った。

円形部内面は、ふくらんでフラスコ型をなしている。

入口部と仮称した部分は、東西巾80~85cmで、南北に三段の階段状を呈し、円形部との接点で壁面が外湾している。

坑底は、中央部がやや中高で周辺が低いが、全体として、南より北西へかけて傾斜し、東側壁下の底との差は約12cmある。

坑底のプランは円形をなし、底面は、IV層とした赤褐色粗粒砂上に、2~3cmの厚さの暗褐色火山灰質粘土を貼りつけ、ほぼ平坦をなしていた。この平坦面が床面と思われる。

1号土坑内より出土した遺物は、炭化した木材（A→長さ70cm、巾12~15cm、B→長さ110cm、巾8~15cm、A、Bとも厚さ3~4cm）2本、上記した床面に埋まって、図版7.のような状態で出土した。

出土土器は、小片のみであるが、施文、胎土、厚さ等から判断して後期初頭十腰内工式土器である。(P.L1拓影1.2) なお出土土器については後述する。

☆2号土塙、(図版6.7.)…(U字形)

2号土塙は、T.P11-b区、C区のIIa層下で確認した。

この土塙は、1号土塙に西側の一部が切られ、且つ東側の一部も3号土塙に切られている。すなわち1、3号土塙より古い時期の構築と推定される。

平面プランは、やや不整な円形と思われる。計測値は、開口部(現存部)で、東西径190cm南北径180cm、深さは、現存壁上より22cmである。

塙底は、やはり不整な円形プランをなし、長径185cm、短径180cmを計った。なお塙底には一号土塙のような貼り土はない。

北西壁面は、ややふくらみを有し、フラスコ状を呈するが、他はほぼ垂直であり、U字形ピットした。

出土遺物は、塙底上の床面には検出されず、土塙中央部北側、および西側のIIa層下位において、土器片約25片(同一個体)と、円礫、角礫2個を検出した。(微細図I)

この土器片は、当遺跡の施文特色を持つ、前期末の円筒下層d:式土器である。(P.L2-8~13、拓影8~13、アーエ)、土器については後述する。

☆3号土塙、(図版6.7.セクション図版6、P.L2-14、15、P.L3-16~29、拓影19~26)  
…(U字形)

3号土塙は、T.P11、12、-C区、d区のIIa層下端において確認したものである。

この土塙の南西の一部において、前述のとおり、2号土塙を切って構築されているので2号土塙より新しいものと思われる。

計測値は、長径(東西)200cm、短径(南北)190cmのほぼ円形プランをなし、深さは、確認面より50cmである。

側壁は、南部、北東部の一部は、ふくらみを有し、外湾するが、他は、ゆるい傾斜を持つ直壁であって、全体としての断面形はU字形を呈している。

塙底部プランは円形を呈し、長径(東西)190cm、短径(南北)185cmを計った。

また、塙底中央部に、すりばち状のPitがある。(図版7、Pit A650)、このPit(ピット)は、他の柱穴とその形状が異なっているが、焼土、木灰、その他の遺物はない。

このA650としたPitの計測値は、上縁径40cm、深さ12cm、底面径20~25cmを計ったが底面は中央部が低く丸底をなすものである。

遺物は、塙底面よりは検出されず、土塙上面のIIa層中部において、土器片が密集して出土し、且つ大形打製石槍、石棒破片が伴出した。(P.L38-48、P.L40-62)

この土器片は、大部分は、前期末の円筒下層 d<sub>2</sub>式土器で、後期十腰内 I 式の破片が上層に 2 片混入していた。

前に述べた 2 号土塙上より出土した土器も円筒下層 d<sub>2</sub>式であるが、そのものは、施文に本遺跡の特色を見せてているのに対して、3 号土塙上より出土したものは、この地方ではノーマルな施文のものである。

なお、土器については、後述するが、2 号、3 号土塙の切り合いから、同じ d<sub>2</sub>式土器でも時差が確認されるものである。

すなわち、2 号土塙上面のものが古く、3 号土塙上面のものが新しいと判断される。

☆ 4 号土塙… (図版6.7.)

4 号土塙は、T.P10-C 区 - I b 層下で確認したもので、平面プランは不整な菱形をなすものである。

計測値は、東西 88cm、南北 72cm、深さ 80cm である。

4 号土塙の壁面は、北東壁はやや外湾気味であり、南東壁はほぼ直壁をなすもので塙底は平面である。

出土遺物は、土塙上の I b 層下より十腰内 I 式土器片、土塙内の確認面より 30cm の深さに有柄石鐵 1 点 (P.L34-8) が出土した。

☆ 5 号土塙… (図版7.)

この土塙は、T.P10、11 の C 区にまたがっており、II a 層下端で確認した。

5 号土塙は、前述の 2 号土塙に接しており、あるいは 2 号土塙に関係がある施設であった可能性もあるが、この土塙から時期を決定する遺物の出土はない。

確認面において、後期十腰内 I 式土器片の出土を見るも、これを持って、この土塙の時期決定の資料とするには不安がある。 (P.L26-330~334) 、また、この土塙内より石鐵の出土を見る。 (P.L34-94)

計測値は、東西 83cm、南北 70cm、深さ 60cm を計った。

平面プランは不整な菱形を呈し、壁面は土塙上縁より内済して塙底に至り、且つ底面は丸底をなすものである。

また形状は、4 号土塙と近似するものである。

☆ 6 号土塙… (図版6.7. 写 3) (ひょうたん形)

この土塙は、T.12、13 の b 区にわたって検出した。

平面プランは、Pit (柱穴状) が 2 個切り合ったかたちのひょうたん形をしており、確認した時点では、柱穴として Pit ナンバー 7、8 としたものである。

精査の段階で、図に示したように、置石の下に土器片が埋蔵され、且つ東側が浅く西側が深

くなって段がついた小土塙であることが判明した。またすぐ北側に美麗に磨かれた置石（P.L. A645-91）が1個あった。

計測値は、長径（東西）72cm、東側円（南北）径52cm、西側円（南北）30cm、両者の接するくびれ部18cm、底面径は東側円で22cm、西側円30cm、深さは、それぞれ46cm、48cmである。

この6号土塙内の置石下より出土した土器は、破片のみであるが器形、施文等から縄文時代後期初頭十腰内工式土器である。土器については後述する。（P.L.4.拓影28～35）

以上、B地区において検出した土塙は、1～6号の6個である。これらの中にもう後述するA、C地区で検出した土塙を加え、形状、伴出土器の編年型式から下記のように5類に分類が可能である。

〈土塙の分類〉

- |    |          |     |                                   |
|----|----------|-----|-----------------------------------|
| 1類 | フラスコ形土塙  | —1. | 7号—後期十腰内工式                        |
|    |          |     | 8号—後期十腰内工式                        |
| 2類 | U字形土塙    |     | 9号—中期末樅林式                         |
|    |          |     | 2.3.10.11.12号—前期末d <sub>2</sub> 式 |
| 3類 | 不整菱形土塙   | 4.  | 5号—後期十腰内工式                        |
| 4類 | ひょうたん形土塙 | 6号  | —後期十腰内工式                          |
| 5類 | すりばち形土塙  | 13号 | —中期末大木10式併行                       |

（註、5号土塙については、多少の疑問が残る）（長沢、川村、新谷）

〔A地区〕…(註、A地区は、T.P 1~9で構成される。)

A地区において検出された土塙は、T.P 1、および、その拡張区において確認されたものである。

このT.P 1、およびその拡張区は、遺構が重複しており、かなり複雑な様相を示していたが、この項では、土塙に限定して述べることにしたい。なお検出した土塙は7~12号土塙である。以下順にその概要を記すことにする。

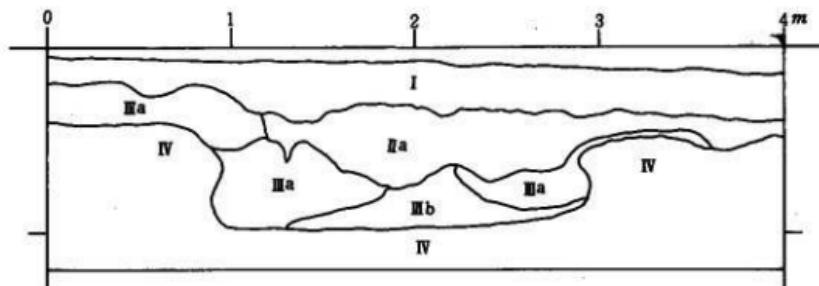
☆7号土塙 (図版8.セクション図M13) (フラスコ形)

この土塙は、T.P 1のb区、C区において、IIa層下端で確認した。

平面プランは円形と思われるもので、南端に小入口部を持ち、北半は、8号土塙によって切られているものである。

計測値は、東西214cm、南北144cm(8号の接点まで)、深さは確認面より59cmを計った。

〔7号土塙、層序実測図〕 No13 (r~s)



この7号土塙は、塙内にIIa、IIIa、b層が乱れて互層状を呈しており、層序が自然堆積層ではないように観察した。

すなわち、3~4時期にわたって、土塙外も含めて、人為的に移動させられたものと思われる。やや主題からそれたが、そのことについては、考察の項にゆずり、図版8.および、セクション図、M13によって、層序の乱れを理解されたい。

壁面は、ふくらみ、フラスコ状を呈しているが、一部崩れ落ちている(西壁)、塙底は円形で平面をなし、第IV層(赤褐色粗粒砂層)が固くふみ固められていた。

この塙底には、2個の置石と土器片が貼りついて出土した。この土器片は、後期初頭十腰内工式土器である。(P.L 5)、土器については後述する。

☆8号土塙 (図版8.セクション図、M1) (U字形)

この土塙は、7号土塙の掘り下げによって確認したもので、T.P 1のC区、d区にまたがり北壁に接しているものである。

南側は、7号土塙を切って掘り下げており、一段深いものである。したがってこの8号土塙は、前者より新しいと判断される。

形状は、北壁に接するため全体形は不明であるが、平面プランは円形で、且つ断面形はU字形をなす。（現存部）また塙底は平面で、やはり円形と思われる。

計測値は、東西290cm、南北125cm（現存部）、深さは、7号土塙確認面より、78cmで深い。

この土塙内より遺物は検出されないため構築された時期については判断資料はないが、7号土塙を切っていることから、それより新しい時期と推定される。

☆9号、10号土塙（図版8.セクション図、M6.2）（U字形）

この9、10号土塙は、T.P.1のC区、d区の拡張区において、IIa層下より検出、確認したものである。

10号土塙は、9号土塙の中にすっぽり入っており、壁面は、北側壁は共通である。また南壁は、10号土塙のものが残存している。

すなわち、壁面より観察すると（セクション図M6.2）、10号土塙があった地点へ、その壁面を広げながら、9号土塙が造られたものと観察される。

9号土塙の塙底は、第IV層とした赤褐色粗粒砂上面で、ほぼ円形プランである。

この塙底の周囲は、わりに固くしまっているが、人為によるものと観察された。

周囲を除く塙底面は、軟く、サラサラしている。この塙底の中央部に、セクション図M6.2.に示すとおり多量に木灰を混入したIIa層がレンズ状にあり赤褐色の土器片が出土した。この土器片は、二次的に火を浴びたもので、縄文時代中期末櫻林式土器である。（P.L6.拓影14~18）

この9号土塙の底面中央部が軟いので実測後、さらに掘り下げると、14~16cm下に固くしまった10号土塙の塙底が検出された。

10号土塙の底面も円形プランであり、9号土塙の塙底と異なり固く堅緻であった。

すなわち、10号土塙の塙底は小さく、9号土塙が広い塙底を持っていること、さらに、9号土塙の塙底面上に木灰とともに土器片があること、塙底と接する壁に段がついている点から、10号土塙のあった地点に新しく9号土塙を拡張して構築し、塙底は一部埋めて床面としたものと判断した。

9号土塙の平面プランは円形であって、計測値は、東西190cm、南北200cmを計った。

塙底径は、9号→東西190cm、南北192cm、10号→東西166cm、南北160cmである。深さは、9号が確認面より82cm、10号は、同じ確認面より95cmである。なお、9、10号とも形状は、塙底の立ち上り等からU字形ピットと思われる。

また9号土塙の塙底より出土した土器については別項で述べることにする。

☆11、12号土塙（図版8.）（U字形）

この11号土塙は、T.P 1 の d 区 II a 層下で、9、10号土塙とともに、また12号土塙は、7、8号土塙とともに隣接して確認したものである。

両者とも北壁に接しているため、完掘しないものである。

したがって形状その他は不明であるが、U字形ピットと推定される。ただし12号土塙の塙底面は確認できた、深さは、7号土塙確認面より50cmを計った。

以上、B地区において検出した土塙7~12号の形状、時期等を再掲すれば下記のようになる。

|            |     |           |
|------------|-----|-----------|
| 1類 フラスコ形土塙 | 7号  | 後期十腰内工式   |
|            | 8号  | (7号より新しい) |
|            | 9号  | 中期末樅林式    |
| 2類 U字形土塙   | 10号 | (9号より古い)  |
|            | 11号 | } 不明      |
|            | 12号 |           |

〔註。10、11、12号は、第一次調査の  
土塙と比較して、一応前期 d<sub>2</sub> 式期  
として前掲した。〕

〔C地区〕 … (註。C地区は、T.P15、16で構成される)

C地区は、前に述べたように、第二次発掘地の南端にある。また T.P 15、16の出土土器の中に樅林式土器を含むことから一地区としたものである。

このC地区のT.P16より1~12号と異なる性格の小土塙を検出した。以下これについて述べることにする。

☆13号土塙 (微細図II、セクションA-10) (すりばち形)

この13号とした土塙は、T.P16、b区のII a層下に検出したものである。

計測値は、東西60cm、南北72cm、深さ40cmを計った。

この土塙の形状は、平面プランは円形で塙底は丸底をなしすりばち形のもので、この土塙の中に、口縁部を南西にして斜位に埋納された完形深鉢形土器一個を検出した。

検出した土器は、第六群土器とした大木10式に比定されるものである。このことについては後述する。(写真5、P.L 8-76)

この土塙は、前に掲げたように、本遺跡で検出した土塙の5類に分類されるものである。

## (2) 住居跡 (図版7.)

住居跡は、B地区のT.P12、13.-b区、c区にわたって、第IV層上面で検出した。

住居跡の壁面は、図版7.のように、東側の一部分のみ残り、他は、追跡できなかった。

住居跡の床面は、後に構築されたと見られる。6号土塙、および多数のピット等により破かいされ、さらに炉跡内にも、Pit No.32、34、35が掘り込まれて、床面の痕跡は殆んど認められなかった。

6号土塙は、後期初頭十腰内工式土器を埋蔵し、Pit No.54上には、中期末樅林式に比定される土器 (P.L 7-67~73、拓影 5~6) さらに、Pit No. 30には、Pit 内に網代文底部の土器が内在していた。(P.L 7-74、75、拓影 7.)

また住居跡を構築した時期は、炉址の形態、および、Pit No.54上の土器から中期末と推定されるものである。

このように、住居跡のあるT.P12、13の第IV層上面は、少なくとも三時期にわたって生活面として利用されたものと推定される。

本論からそれたが、以上的情況から、床面は凸凹があり床面、壁面は一部分より認められなかった。

図版7.に示すとおり、炉跡は、南側の一部が、Pit No.32により破かいされ、さらにPit No.34、35、および、北側には東西に掘り込まれた細長い溝状の掘り込み等により荒らされていた。

さらに、石窓の一部は消失し、北、西に一部が浅存していた。この石窓に使用された石の石質は、安山岩と硬質頁岩である。

炉跡の大きさは石窓の石の配置、木灰のひろがりから、ほぼ東西78cm、南北70cmと推定される。

また形状は、ほぼ隅丸方形のものと思われる。すなわち、炉跡の形状、大きさ等から中期末のものとしてほぼ間違いないと思われる。

炉内には2~3cmの木灰、その下は焼けた第IV層である。確實に住居跡に伴う柱穴と断定できるものは不明であったが、配置状況、大きさ、深さレベルからみて、Pit No.33、31、28、54、は主柱穴と推定される。

この住居跡を含むT.P12、13の生活面上(第IV層)からは、6号土塙内の土器のはかは、遺物は殆んど出土せず、さきに述べた Pit 外のもの以外は、ごく少數の破片が、生活面より検出されたのみである。土器については後述する。

### (3) 柱穴群 (Pit)

第二次発掘面より検出した柱穴状Pitは、B地区-1~64、A地区-1~12、C地区-1~5である。

これらの個々について述べる紙数もないで、各地区毎に分け、概要を述べることにしたい。

#### ☆土塹、住居跡に伴うPit. (図版7.8.微細図II)

(A地区) → (図版8) (註. PitNoで示す、以下も同様である。)

7号土塹 → 5. 6  
8号土塹 → 7. 8. 9. 10 ] 1. 2. 3. 4  
9. 10号土塹 → 11. 12  
(No.1~4は、7. 8号に関連あるものと思われる。)

(B地区) → (図版7)

1号土塹 → 8. 10. 11. 12. 16. 17. 23.

3号土塹 → 46. 47. 49. 50. 51. 52.

住居跡 → 28. 31. 33. 53. 54. 55.

Pit上または、Pit内より土器を検出したもの

(PitNo30. →網代文施文底部等)

(PitNo54. →櫻林式比定土器)

B地区64個のうち上記の柱穴は一応それぞれの遺構に伴うものと推定されるが他は不明であった。しかし、1~6号土塹、および住居跡に関連するものが他にもあったものと推察される。

(C地区) → (微細図II)

13号土塹 → 1. 2. 3. 4. 5.

この地区では、T.P16の13号土塹に伴なうPitのみであってT.P15からは検出されない。No.1~5のPitは、いずれも13号土塹に伴うものであり、そのうち、No.1は、西へ20°程傾斜したものである。

以上、本遺跡の第二次調査において検出した遺構についての概要にふれたが、つぎに出土遺物について述べることにしたい。

[参考表] 繩文時代編年表 (土師器を含む) (表Ⅱ) 1977 (新谷)

| 推定年代         | 縄文時代区分                | 編年型式<br>(東北北部)   | 本遺跡出土土器の編年                               | 近隣の参考遺跡        |
|--------------|-----------------------|--|--|----------------|
| 6000         | 早期                    |  |  | 芦野遺跡<br>七夕野遺跡  |
| 5000         | 前期<br>(円筒下層式)         | a<br>b<br>c<br>d<br>d <sub>2</sub>   | • 第一群土器                                  | 石神遺跡<br>原子A遺跡  |
| 4000         | (円筒上層式)               | a<br>b<br>c<br>d<br>d <sub>2</sub>   | • 第二群土器                                  | 原子C遺跡<br>一本松遺跡 |
| 4000         | 中期<br>(大木系土器)         | I<br>II<br>III<br>大木10   | • 第三群土器<br>• 第四群土器<br>• 第五群土器<br>• 第六群土器 | 大木系<br>土器      |
| 3000<br>2500 | 後期                    | I<br>II<br>III<br>IV<br>V<br>VI<br>II  | • 第七群土器<br>• 第八群土器                       | 十腰内遺跡<br>原子B遺跡 |
| 2000         | 晩期                    | B <sub>1</sub><br>(亀ヶ岡)<br>B <sub>2</sub><br>B C <sub>1</sub><br>B C <sub>2</sub><br>C <sub>1</sub><br>C <sub>2</sub><br>A <sup>1,2</sup><br>A' <sup>1,2,3</sup> | • 第九群土器                                  | 亀ヶ岡遺跡<br>観音林遺跡 |
| 歴史時代         | 第一型式<br>第二型式<br>(土師器) |  | • 第十群土器                                  | 原子F遺跡<br>大沢内遺跡 |

☆註 \*印は 本遺跡出土の土器型式を示す

中期の編年区分は、鈴木克彦氏の論文を中心とし、それで分類ができるないときは、大木式土器の分類を併用し、さらに筆者の私見も加えて作成した。

参考遺跡は、近隣のもののみとした。

#### (4) 出土遺物

出土した遺物は、土器、土製品、石器、石製品に分けられるが、発掘区によって、出土遺物が集中するところ、遺構群の集中地点土器、石器の廃棄場等、地区によって特色があった。

以下、土器、土製品については、A、B、C地区ごとに、石器、石製品については、一括して分類し述べることにする。

##### 〔土器、土製品〕

土器類は、りんご用ダンボールで約15箱の出土量である。発掘面積 220 m<sup>2</sup>に比して極めて少ない。

また、完形、または復原できた土器は、T.P16より出土の深鉢形土器1、T.P1塙張区より出土の注口土器1個体で、他はすべて破片のみであって、本遺跡の性格を如実に物語っているものと推察される。

出土土器の編年型式は、円筒下層d式、円筒上層a式、櫛林式、中の平田式（大木9式、最花式）、大木10式、十腰内I式、II式、および晚期、さらに土師器を含んでいる。

すなわち、縄文時代、前期、中期初頭、中期末、後期初頭、晚期、および歴史時代にわたるものである。

〔参考〕→縄文時代前、中、後、晚期編年表。

##### (表II)

前掲の参考表に示すとおり、本遺跡より出土した土器は、第一群より第十群に型式分類される。

本県においては、中期末の編年について、研究者によって、その編年型式に相違があって、未だ流動的であるが、鈴木克彦、1975、の論文を中心に、筆者の私見を加えて、中期の編年表とした。

この編年表を基礎にして、土器を10群に分類し、〔<sup>b</sup>塙内出土の土器〕、〔柱穴内、外より出土した土器〕〔各地区出土土器〕、に大別し、以下に述べることにしたい。

土器の出土状況を地区毎に概観すると、前期末、中期末の土器は、土塙を中心として出土し、その量は少なく、後期の土器は、各地区にわたって平均的に出土する傾向にあり、さらに中期末の土器は各地区に散見する傾向もある。

出土量の多い地点は、T.P15、T.P16、T.P8、T.P7、T.P1であって、そのうち、T.P7、16の一部は土器、石器の廃棄場と考えられる。

すなわち、本遺跡の北端、南端に、凹地、傾斜地を利用した廃棄場の設定は興味深い。この点については考察の項にゆずり、ここでは、発掘面の土器の出土状況について一般的傾向を述

べておくことにする。

a 〔土塙内出土の土器〕

(B地区)

①、1号土塙出土土器（拓影1.2 P.L1-1~7.）

1号土塙内出土の土器は、7片の小破片と、破損した小形石皿1個、(P.L1-80-1)および、第7図に示した二本の炭化木材である。

土器は、小破片のみであるが、(拓影1.2 (P.L1-1.2))とした。網様撚糸文(第一種)の施文された土器片2片は、土塙床面である暗褐色火山灰質粘土(貼り土)に貼りついて出土したことが幸いであった。

この2片は、L<sub>1</sub>F<sub>1</sub>の撚糸を単軸に巻き回転して施文したものである。すなわち、本遺跡出土土器の第七群土器(十腰内工式)である。他の5片は土塙内壁のIIIa層下位より出土した、(4.5.7)は同一個体のもので、左下り、0段多条のR.L繩文が施文され、(3.6)は施文もないで型式認定は困難であるが一応第三群土器とした。また、(6)は焼けたもので、これらはいずれも破片であるがカーブから推定して、小形、または中形の鉢形土器と思われるものである。なお、(4.5.7)は繩文の原体、器厚、焼成等から中期末第三群土器(複林式)のものと思われる。

②、2号土塙内出土土器(P.L2-8~13、拓影8~13、ア~エ)

この土塙内より出土した土器は、土塙内IIa層下位の出土で塙底面上には遺物はなかった。

この土器は、微細図Iに示すように約25片の破片で出土した。すべて同一個体のもので、(拓影8.~13.ア~エ、P.L8.~13.)に示したものは、口縁部、胴部、底部の一部分である。

器形は大形の円筒形深鉢形で、いわゆる円筒土器である。口縁はゆるく外反し、平縁で小突起が四対付くものと思われるが、この突起は、この期のものとしては小さい。色調はあざやかな赤褐色を呈するが、胴部より下半は暗灰色である。また底部は平底と思われる。胎土は精選されたもので、纖維の混入が、少量認められる。

施文は、口縁部の突起下に垂下する隆帯が三条、四か所に付けられ、これらの隆帯(隆起線文)上、および口縁部には押圧繩文が斜行、または垂直に、刺突文風に施文される。また口縁部と肩部の境には横に一周する隆帯があり、その隆帯上にも押圧繩文が施文されている。

胴部には地文として、三段R.L.R複節繩文、および0段多条のR.L繩文が不規則に縱走、斜行し、且つ隆帯直下胴部上半と下半には、結節した原体の回転による結節繩文が二条ずつ横に一周して施文されたものである。

2号土塙より出土した土器は、この一個体のみであるが、器形、施文等から本遺跡出土土器の第二群土器(円筒下層d式)とした。

なお、口縁部に刺突文風に押圧繩文の施文されたものは他遺跡と比較しても出土例が少な

いものと思われる。

③、3号土塙出土土器（拓影12、19~23P.L 2~14、15、P.L 3~16~29）

3号土塙も塙底面に遺物はなく、出土土器は、土塙内に落込んだIIa層中部と、中部下より検出した。

出土した土器は、三型式に分けられる。すなわち、拓影12、に示した第七群土器1片、（拓影19~23、（P.L 3~15~29）に示した第一群土器25片、および、（拓影19→P.L 2~14）に示した第五群土器（中の平III式→最花式）である。以下これらの土器について順に述べることにしたい。

第七群土器（十腰内工式）1片は、IIa層中位の上部より出土したもので一応混入と考えた。

色調は黒褐色を呈し、深鉢形土器の口縁部下の破片と思われる。施文は、左下りに斜行するL.Rの纏文を地文に沈線文が施文され、この沈線文は、平行沈線文と沈線によって方形に区画する文様パターンのものと思われる。

第五群土器とした土器（拓影19、22、21、P.L 2~14、P.L 3~21~25、28）は破片であるが土塙内に落込んだIIa層中位より出土した。

（拓影19、P.L 2~14）はカーブより推定して、口縁部が外反する小形の深鉢形土器と思われる。施文は、縦位の単軸撚糸文（R  $\{ \frac{f}{g} \}$ ）を地文に逆U字形の沈線の中央に一本の沈線を加え、三本平行に垂下する懸垂文が施文されているものである。

（拓影20→P.L 3~21）は、口縁部が無文で肥厚し、0段が多条のR.L纏文が右下りに施文され、（拓影21）も口縁が無文で且つ肥厚し、0段多条のL.R纏文が施文された口縁部破片で、小形の鉢か、深鉢形土器と思われる。

（P.L 3~22、23、28）の3片は、いずれも胴部破片であり、且つ、共通して、0段多条の、R.L（22、23）、L.Rの纏文が継走、斜行して施文されたものである。

また20は、や、右下りの撚糸文（単軸R  $\{ \frac{f}{g} \}$ ）、21は、口縁部下の破片で、横位の沈線を見せ、施文は、R.L右下り纏文である。

これらの（22~25、28）は、鉢形か深鉢形の破片と思われるが推定の域を出ない。

（26、27、29）は、無文で焼けた土器片である。また（28.）も焼けているため器壁が剥離しやすいものである。

以上述べた、（拓影19、20、21、P.L 2~14、P.L 3~21~29）は、いずれも、口縁部形状、施文、（懸垂文、0段多条の纏文）、胎土、焼成、およびレベルから第五群土器としたものである。

第一群土器、（拓影22、23、27、P.L 2~15、P.L 3~16、17、18、1920.）

この6片は、いずれも別個体の円筒下層式土器であって、IIa層下位の出土である。

(拓影22→P.L.3-19)は隆起線文を有し、その上に撚糸文の施文された円筒土器の破片で、他の施文は不明なるもこの群とした。

(拓影23→P.L.2-15)は、口縁部破片で、波状口縁をなし、突起は二叉に分かれ、その直下に縱位の懸垂文(隆起線文)が付されている。施文は、口縁部、口縁直下、頸頭に押圧撚糸文が、縱位、斜位、横位、に施文されている。色調は、外面暗灰色、内面明赤褐色、器厚1.4cmであって大形円筒形土器と思われる。胎土に纖維の混入はなく、雲母、長石を極く少量含んでいるものである。

(拓影24.P.L.3-16)は、口縁部破片で平縁である。器形は円筒形と思われるがカーブから見て肩部が張るものらしい。施文は、(15)と同様、單軸に、密に巻いた撚糸文を横位に五条押圧したものである。色調は、焼けているため白の勝った赤褐色で、胎土に細砂を含んでいる。器厚は0.7cmを計った。

(拓影26→P.L.3-17)、これも口縁部破片で平縁と思われる。器形は円筒形と思われるが、口縁は外反せず直口のものである。施文は、口頭部に5~6条、撚りのゆるいL.R原体を押圧した押圧纏文、肩部には爪形刺突文を一列付し、さらにその下方に細い沈細文を縱位に施文した特異なものである。おそらく本遺跡特有のものであろう。

胎土、焼成ともよく、細砂を含むが堅致である。色調は、暗赤褐色、器厚は1.2cmである。

(拓影25→P.L.-3-18)、口縁部破片で、外反が強いことから肩部の張る円筒形土器と思われる。施文は、やはり單軸に撚糸を巻いた施文具で横位に6条押圧したものである。(L.R) 色調は赤褐色、胎土に細砂を含む、器厚は1.0cmを計った。

(拓影27→P.L.-3-20)、このものは、口縁下の破片で、わずかに撚糸文と思われる施文が認められるもので、他は不明である。色調は黒色、胎土に砂粒を含み、器面は粗末で、焼けているものと見られる。一応第一群土器とした。

以上、3号土塙内出土の土器は、第一群土器を中心であつて、第七群土器1.第五群土器1が出土した。このことから、3号土塙の時期を円筒下層d<sub>2</sub>式期と判断したことを付記しておく、なお2号土塙内出土土器とのレベル差は0.5cmであつて殆んど差はないが3号土塙が新しいことから、円筒下層d<sub>2</sub>式土器内での時差が考えられる。(P.L.8-13とP.L.16-19)

#### ④、4号、5号土塙

4、5号土塙内から土器は出土せず、4号土塙内より(P.L.34-8)の石鎌が出土し、5号土塙内より(P.L.3-94)とした石鎌が出土した。両土塙上のIIa層より、第七群土器の出土を見るも、土塙と直接関係があると認められず、わずかに落込んだ地点という程度であつ

た。そのため、B地区出土土器の項でふれることにする。

⑥、6号土坑出土土器、(拓影28~35、P.L 4-30~42)

6号土坑内より出土した土器片は、計45片で、器形の識別できたものは、7個体分である。そのうちわけは、鉢3、深鉢2、壺1、甕1の7個体分である。破片を精査すると11個分となるが他は小片のため、器形の判定は推定の域を出ない。

(拓影28、P.L 4-30、31)の2片は、口縁部下の破片と底部破片である。器形は、口縁部直下がふくらむ橢形の土器で底部の径は小さいものである。

施文は、細い沈線文を円弧状に施文し、且つ底面にも施文のあるものである。色調は、一部黒色、乳白色の部分もある。胎土には砂粒を含み、焼成も悪いが、二度焼けたものと推察される。器厚は0.4cmを計った。

(拓影35、P.L 4-33)、3片の小片で、壺形土器の口頸部破片である。

口頸部は細く、やや外反し、急激にふくらむ器形である。施文は、肥厚する口縁下に細い沈線文、頸部下端にも細い沈線文が1~2本施文される。胎土に砂粒を含み、焼成はよい、器厚は0.4cmである。

(拓影29、P.L 4-32)、小形の鉢形土器と思われるもので、肩部がふくらむ器形のものである。

施文は、口縁下に、細い平行沈線文、肩部に一列の刺突文が付され、胸部には曲線文が施文されたものである。

色調は黒灰色、胎土、焼成ともやや悪い、器厚は0.5cmを計った。

以上のものは、小形で器厚も0.4~0.5cmであり、第七群土器の組成の一部をなすものである。

(拓影30、32、P.L 4-30、35、36)、このものは3片の破片で出土した。3片とも胴部破片で、大形の鉢形土器のものと思われる。

施文は、平行沈線文と方形沈線文、それに曲線文を組み合わせた文様構成のものである。色調は、明褐色、胎土に砂粒を含むが焼成は良い。器厚は、0.6cmである。

(拓影34、31、P.L 4-37、38、41、42)、このものは、26片の小片になって出土したものである。

(拓影34、38)は口縁部、(拓影31、37)は胴上部、(32)は、胴中部、(33)は胴下半部と思われる。

器形は、大形の壺形土器と推定される。口縁部は、外反し、頸部がくびれるものであるが、カーブから見て、肩が張らないものと見られる。

施文は、頸部に一条、胴上部に二条の平行沈線文が施文され、胴部下半は無文のものと思われる。

色調は、明赤褐色、胎土、焼成とも精選されている。器厚は、0.9~1.0cmとや、厚いものである。

(拓影33→P.L 4-39)、このものは4片の破片で出土した。

器形は、深鉢形と思われるが断定は控えたい。口縁はや、内傾するものと思われる。

施文は、口縁に左下りに斜行する押圧繩文を施文し、その下に浅い刷毛目状沈線文を一条、その下は磨消手法によって無文帶となっており、さらに二条の無文隆起線文があるもので、胎土も良好、焼成もよく堅緻なものである。また器厚は、口縁で0.6cm、隆帶の間で1.0cmを計った。この4片は、口縁部形状、施文、胎土等から、一応第六群土器の仲間に入れておくことにする。

(P.L 4-40)、このものは、1片の出土である。器形は平縁の深鉢形土器と思われる。施文はなく折り返し口縁をなすもので、色調は黒灰色、胎土に砂粒を含むもので焼けている。器厚は0.7~0.8cmである。

このものは、折り返し口縁から第七群土器と考えられるが断定は控えたい。

ここに掲げたもの他は細片のため割愛した。中には中期末と思われる破片も含まれる。

以上、6号土塙出土の土器は、第七群土器を中心をなす。このことから土塙の構築時期を十  
腰内工式期としたものである。

B地区において検出した1~6号土塙出土の土器を中心に概要を述べてきたが、つぎにA地区にうつることにする。

#### (A地区)

##### ⑦、7号土塙土場土器 (P.L 5-43~61)

7号土塙より出土した土器は、土塙内Ⅲa、Ⅲb層より約40片の破片で出土した。P.L 5-43~50はⅢa、P.L 5-51~61、はⅢb層出土である。

器形は、破片のため断定はできないが、鉢形と深鉢形と思われる。P.L 5-43~58の器厚は、0.4~0.5cmでいずれもうすいもので、(59~61)としたものは底部破片(59、60)は、鉢または深鉢形のものと思われるが底面は、平底である。

例は、これも底部であるが、胴部下端より底部へうつる接点上がくびれ、底部がせり出している器形で、おそらく楕形をなすものの底部であろう。

色調は、暗黒色が中心で、6個は明黄褐色である。

器形は、深鉢と思われるもの、(45、46、58、52、51、56、57)、鉢形と思われるもの、(43、44、47、48、49、50、53、54、55)の2器形に分けられる。

口縁部は、波状口縁のもの、(47、52、56)、平縁のもの、(40)、他は不明である。

施文は、沈線文を主とするもの、(43~53、57、58)、網目状燃系文（第一種）のもの、(54~56)に大別される。

沈線文を主とするものは、さらに類別されるが、破片のため、文様を構成する要素が明確でないため省略する。

これらの7号土塙内より出土した土器は、いずれも器形、文様等から、本遺跡出土土器の第七群土器（十腰内工式）である。

以上のことから、7号土塙の構築時期を十腰内工式期としたものである。

⑧、8、10~12号土塙より土器類の出土はない、つぎに9号土塙出土土器について述べることにする。

#### ⑨、9号土塙出土土器（拓影14~18、P.L-62~66），

9号土塙より出土した土器は、全部で19片である。これらの土器は、施文、胎土、器厚等により4個体の破片に識別できた。

この土器は、T.P1-西壁セクション、(セクション図No.2)に示すとおり、IIa層がIIa'層を中心として二段に分かれているが、下段のIIa層下端、すなわち、9号土塙の塙底上の木灰層より出土したものである。

(拓影14~16、18、P.L6-62、63、66)は、胴部破片で相当大型の甕か深鉢形の土器と思われる。

施文は、巾0.5cm程度の沈線文が渦文を構成しているので、地文に継続のR.L燃系文が施文されている。色調は赤褐色、胎土に砂粒を含み、二次的に焼けたもので、16片の破片で出土した。

(拓影16)は、縄文のみの破片で、大型の甕か深鉢の胴下部破片と思われる。施文された縄文は、0段条条のR.L縄文が継続する。

(拓影17→P.L6-65)は、大型の甕か深鉢の胴中央部破片で、縄文のみが施文されている。施文された縄文は、二段単節R.Lで継続するものである。色調は赤褐色、二度焼けたものである。

66、は写真が不鮮明であるが渦文が施文され、その末端が懸垂する施文のあるもので、地文は、0段多条のL.R縄文が横走する。色調は赤褐色、二度焼けているので大型の甕か深鉢の破片であろう。

器厚は、この土塙内出土のものは、1.1~1.2cmで、胎土には、すべてに砂粒を含んでいる。

以上述べた破片は、その施文の特徴から、本遺跡出土土器の第三群土器（楕円式）である。

この楕円式土器は、I、II式等に分類されるが、当該土器は、II式に比定される。

以上の土坑内出土土器から、9号土坑構築時期を縄文時代中期末楕円式期（大木8b併行）と判断した。

（C地区）

⑩、13号土坑出土土器（P.L.8-76）

13号土坑内出土の土器は、一個体の完形土器のみである。他に破片その他遺物は一切出土しない。

この土器の器形は、きわめて特異である。口縁よりゆるく内傾する口頭部は、器高の2/3弱下にあり、肩部が張り、肩部より底部直上までは、わずかにふくらみを見せながら斜行し、底部は外方に張り出すもので底径は、きわめて小さい。（口径20.8cm、器高31.7cm、底径6.5cm、胴部最大巾18.1cm）

施文は、口縁直下より、右下リ二段単節（L.R）斜行縄文が地文として施文され、この地文は、肩部下で継走し底部へ至る。

この地文の上に、口縁下と頭部中央の上、下二段に、いわゆる耳状隆帯（粘土ひもによる）が付され、それが対象するかたちで配置され、3対と3こが交互に器面を飾る。この隆帯間を結んで弧状沈線文が二段に施文されている。

色調は暗灰色、下半は赤暗灰色、胎土、焼成とも良好であるがや、もろい。

この出土土器は、特異な器形、施文を有するもので類例がないと思われるが、一応耳状隆帯の変形として、本遺跡出土土器の第六群土器（大木10式）としておく。

以上、1~13号土坑に伴う土器についてその概要を述べてきた。これらの出土土器と土坑の形状から、前に示したように、土坑の構築時期を判断したものである。

b、〔柱穴内、外より出土した土器〕

（柱穴No.30出土土器）…この柱穴内より、（拓影3、4、P.L.7-74、75）、がほぼ30cm下より3片出土した。（拓影3→P.L.74）は、二段単節L.R斜行縄文が施文され、（拓影4）は、施文が不明、（P.L.7-75）はわずかに沈線文を認める。これらの3片は、器厚が0.4cmである。（P.L.7-75）は、第七群土器であり、他も同期と思われる。

（柱穴No.54上面より出土した土器）

柱穴No.54上より、（拓影5、6、7、P.L.7-67~73）の土器片が16片出土した。

これらの16片の土器を精査すると、4個体分として識別できる。

（拓影6、7、P.L.7-67、76、71）は、同一個体のもので、10片で出土した。出土地点は、

T.P13-a区-IIa層下である。

このものは、口縁部が平縁の小形の鉢形土器で、底部が外方に張り出す器形のものである。施文は、左下りのL.R斜行繩文が口縁部に、胴中央部は横走する沈線が一本と不規則な繩文の施文がある。底部は平底で、不規則な網代文が施文されたものである。

(拓影5、P.L7-68、69)は肩下半の破片で、深鉢形土器の破片と思われる。施文は、0段多条のR.L繩文を地文に、縱位に垂下する二本の平行沈線文があるので、器厚は、1.0cmと厚い。

⑫は、深鉢形の口縁部破片で、波状口縁と思われる。口縁部は肥厚し、押圧燃糸文が施文されるものらしい。その他は不明であるが器厚は0.9cmを計った。

⑬は、2片の破片で出土した。深鉢形の口縁部破片で、施文は、細かい二段単節R.L繩文が縱走するもので、器厚は、0.7cmである。

この柱穴No54上より出土した、四個体分の破片は、いずれも二次的に焼けており、もうくなっている。

この柱穴No54は、位置、レベル等から、住居跡に付随するものと考えられる。出土した土器は、(拓影5、6、7、P.L67-83)の繩文、施文、胎土、焼成等から、榎林式一大木10式のものと思われる。一応、本遺跡出土土器の第六群土器の仲間に入れておくことにする。

以上、この項では、柱穴内、外出土の土器について述べた。すなわち、土塗内出土の土器、柱穴より出土した土器は、その大部分が二次的に焼けている点が注目に値する事実である。

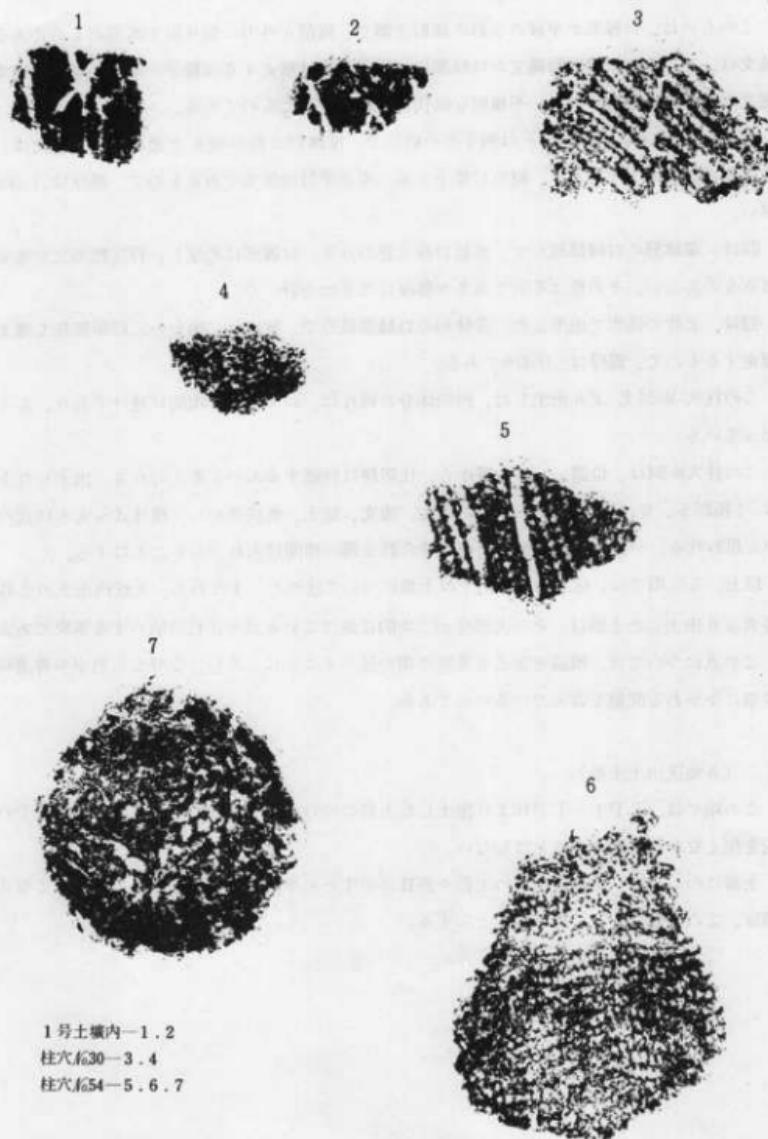
この点については、推論を加えて考察の項で述べることにしたい。なぜなら当時の神遺跡の性格にかかわる問題を含んでいるからである。

### C、〔各地区出土土器〕

この項では、T.P1-T.P16より出土した土器について、A、B、C地区毎に、各T.Pの状況を加えながら概観することにしたい。

土器については、本遺跡出土の土器を表IIに示すとおり十群に分類した。したがって型式分類は、この分類によって行なうこととする。

[拓 影] 1



1号土壤内—1, 2  
柱穴在30—3, 4  
柱穴在54—5, 6, 7

[拓 影] 2

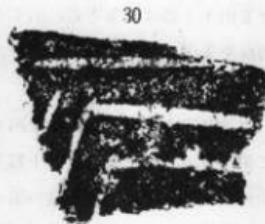


[拓 影] 3



(3号土壤内出土19~27)

[拓 影] 4



(6号土壤内出土28~35)

本遺跡における出土土器は、参考表に示すとおり第一～第十群に分類される。

これらの土器群を先学の研究業績を参考に、多少の私見を加えながら分類し、各地区ごとに述べることにしたい。

まず最初に、本遺跡出土土器の一般的な出土傾向を述べると、A地区では、I a、I b、II a層をとおして第七群とした十腰内I式土器が多く、つぎに第三群～第六群とした櫛林、中の平II、III、大木10式土器が混在し、少量の第一～第二群土器（円筒下層d<sub>2</sub>式～同上層a式）が見られ、さらに混入とも考えられる第九群～第十群土器（晩期の土器～土師器）が數片見られる。

したがって、A地区は土塙を含めて十腰内I式期、大木系土器、下層d<sub>2</sub>式期の三時期に、本遺跡が生活舞台となったものと考えられる。特にT.P7は、土器の廃棄場をなしており、各期の土器が混在して出土した。おそらく十腰内I式期に一括して廃棄されたものと推測される。

B地区は、I a、I b、II a層、すなわち遺物包含層がうすく、土器の出土は土塙および一部のPit内より出土のものが中心で、他は殆んど出土しないと言つてよい。

出土した土器は、遺構にかかわるものは前項で述べたように第一群、第三～六群、第七群土器（下層d<sub>2</sub>式、大木系土器、十腰内I式）で、他は十腰内I式土器がI a、I b層を中心に少量出土した。

このB地区の生活面は、IV層上面にあったことは住居跡や土塙、Pitの状況から判断される。

B地区は、出土遺物が少なく遺構群が密集した地区である。（図版6.7.）

C地区は、A、B地区と出土土器の様相を異なる。T.P15は、II a層が主包含層で第七群土器が多く、つぎに第三～六群土器が多い。また少數の第一、二群を含んでおり、T.P16は擾乱はあるが、II a層下端、すなわちIII層上面に土、石器の廃棄場と13号土塙を有しており、III層上面が大木10式併行期の生活面であることが推定される。

このように土器の出土傾向、遺構の状況から、本遺跡の生活面が三時期に分けられるものと判断されるが、このことは考察の項で再び述べることにする。

#### 〔A地区出土土器〕 (T.P1～T.P9)

T.P4～6は土器等の出土ではなく、T.P9は石器が1点（石錐）出土したのみである。土器の出土は、T.P1、2、3、7、8の5テストピットとなるが、T.P7、8の出土量が最も多く、T.P1がつぎに多い。総出土量の85%は、このT.P7、8より出土した。

第一次調査も含めて、この台地の北側にはT.P2とT.P8を結ぶ方向で、北に向って傾斜するV字状の凹地があり、さらに第一次調査区では、東西に走る凹地がある。この凹地に遺物が

集中する傾向が認められる。

☆ T.P 1 → (P.L 9~11)

- P.L 9~10は、T.P 1の1層より出土したものであるが、主包含層は I b 層であった。(77~79、81~97、99~115)は、第七群とした十腰内 I 式土器である。また (80) は、施文された縄文が O 段多条の L.R であるから中期末のものと思われる。一応第三群土器に入れておく。また (98) は、胴部のふくらんだ壺形土器と思われる。

いずれも破片のみのため器形は不明であるが、鉢形土器を中心とする。なお (80) は、波状口縁の深鉢形と思われる。

施文は、沈線文による S 字状の沈線によって連結する平行沈線文 (77)、縱位鋸歯状文 (78)、方形区画文 (79)、入組沈線文 (81、82、84)、曲線文 (81)、弧線文 (111)、円形文を中心に長方形区画文のもの (99)、条線文 (85、86)、網目状撚糸文 (89~93)、格子目状沈線文 (93~96)、長方形区画文 (97)、磨消縄文 (沈線で区画し、縄文を充填する) → (98) 等である。

器厚は一般にうすく、0.3~0.5ミリの範囲が多い。また胎土、焼成とも良好なものが多いが、一部風化のためもうろいものもある。

なお、(98) は十腰内 I 式の中の I b 式に分類されるものであろう。

- P.L 11~ (116~134) に示したものは、T.P 1~2 層の出土である。

(128) は口縁部破片で、横位の R.L 縄文が施文されたもので、沈線文が斜行する。一応十腰内 I 式 (I b) としておく。

(116~130、132~134) は、縄文時代中期末大木系の土器群である。

破片のため型式分類は困難であるが、一応述べると (116~120、125~127、129、134) は、第三群（楕円形）土器に、(122) は円筒上層 e 式～楕円形、(121、127) は第六群土器（大木 10 式）に比定されるものであろう。

器形は大形の鉢か深鉢とも思われる。施文は懸垂文、溝文が主体をなし、地文には O 段多条の R.L (116、127)、撚糸文 (119、120、126、129) 等が施文される。なお (123、124) は、上のいずれかの型式に属するものと思われる。(132、133) は底部で、これも上記の型式のものである。この大木系土器は胎土、焼成とも良く、特に堅緻である。地文には、O 段多条の R.L ~ L.R 撥糸文が縱行、または斜行するものが多用される傾向にあり、(134) のように口縁部に無文研磨の手法が流行する。

なお、(131) は円盤状土製品である。

☆ T.P' 2 → (135~163)

P.L 12、13~ (135~151) は、T.P 2~I 層出土土器で第七群土器（後期十腰内 I 式）および、中期末大木系土器が中心であって、(135~163) は第 I 層 (I b 層中心)、出土である。

- P.L12- (135~151) は T.P 1 と同様、破片のみであるが、器形は大形の鉢か、胴部のふくらむ深鉢、變形土器と思われる。  
施文は、これも T.P 1 の項で述べたように、平行沈線文 (138、142、147)、長方形区画文 (135)、平行沈線文を「字状沈線で連結したもの (141、148、151)、波状沈線文 (149)、曲線文 (136、150)、弧線文 (140)、入組曲線文 (139、143) その他である。
  - P.L13- (152~163) は、T.P 2 の 2 層出土である。破片のため器形は不明であるが、大形の深鉢か變形土器と思われる。  
(153~158、160) は、第三群土器（榎林式）と思われる。これらの土器は刺突文を持つもの (153)、溝文 (155)、懸垂文 (156)、無文 (154、160)、繩文 (157、158) 等が施文され、(158、160) は、口縁部が膨隆するものである。また、(154) は口縁が折り返えし口縁である。  
(152) は一応、第二群土器、(163) は第七群土器、(161、162) は底部である。  
(159) は、施文の特徴から一応第六群土器と思われる。
- ☆ T.P 3 → (164~168)
- P.L14- (164~168) は、T.P 3-1 層出土の土器である。
- (167) は第一群土器（下層 dz 式）、(168) は網目状撚糸文から、(164) は沈線文から第七群土器と思われる。(165、166) は第三群土器であろう。
- T.P 3 は包含層がうすく、わずか 5 cm 程度であった。
- ☆ T.P 7 → (169~246)
- T.P 7 の I、II 層からは多量の土器が出土した。この T.P 7 とその拡張区は、出土状況の写真に示すように土器の廃棄場の様相を見せていた。つぎに I 層、II 層に分け述べることにする。
- T.P 7-1 層出土土器- (P.L14-169~178、P.L15、16)  
△ P.L14- (169~176、178) は、第七群土器（十脛内 I 式）である。このうち、(175) は菱形区画文が施文される。このものも十脛内 I 式のうち、(I b 式) に分類されよう。  
(177) は朱塗りの土器で口縁内に沈線 1 本がめぐらされ、器表面は平行沈線文 2 本、変形工字文の祖形と見られる入組沈線文に小粘土粒が付されるものである。この土器は第九群土器とした繩文晚期、大洞 A 式に比定されるものである。多分混入したものと考えられる。また、(165、166) は第三群土器（榎林式）に一応入れておく。
  - P.L15- (179~185)、このうち、(179、183、184) は同一個体のものである。器形は大形の變形土器で、施文は口縁部に耳状隆帯、刺突文、弧状沈線文を見せ、地文に○段多条の R.L 繩文を付し、且つ磨消手法によって無文帯をもつものである。  
この土器は第六群土器（大木10式）に分類される。また、(182) も同形式のものと思われる。  
(180、181、185) は第三群土器（榎林式）と思われる。

- P.L16- (186~198)、すべて第七群土器である。施文は平行沈線文 (186~188、190、194、195)、[連結文 (〔字状) → 189]、長方形区画文 (198)、円形文 (191)、曲線文 (193)、波状沈線文 (197) 等が施文される。

また、(196) は沈線による長方形区画文にはさまれた空間が膨隆するもので、この手法は十腰内 I 式土器の一パターンとして、「隆帶文」と名付けておきたい。

- T.P 7-2 層出土土器 (P.L17~20)

△ P.L17→ (199~210)、いずれも第七群土器 (十腰内 I 式) である。

前述しなかった文様パターンにしばって述べると、(199、202、204) は幾何学的区画文を施文し、(200) は溝文を、(205) は口縁より隆帶文と長方形区画文を見せてている。また、(199) は縱位の長方形文、(201) は斜行沈線文である。これらの文様も第七群の施文パターンである。(幾何学的区画文は、I b に分類される)

- P.L18- (211~222)、いずれも第七群土器の一部である。

ここでも文様パターンを中心述べると、(211、215、216) は山型幾何学的区画文、(212) は主として 3 条を一組とする弧状沈線文が二段施文される。(213) は例が少なく、(219) は縱位の弧状沈線文が施文される。(214、217) は波状沈線文に幾何学的区画文も見られる。(220~222) は網目状撚糸文であるが、そのうちの一部を擦消する例として示したものである。

- P.L19- (229~233)、このもののうち、(231) は第一群土器 (下層 d<sub>2</sub> 式)、(223) は第三群土器 (櫻林式)、(224~228) は第六群土器 (大木10式)、(229、230) は第三~六群土器に含まれる。なお、(233) は中の平II式に比定されよう。

また、(232) は第五群土器 (中の平III式、最花式) である。

- P.L20- (234~245) は、いずれも第七群土器である。また、(246) は土師器で、第十群土器として分類した。このものは東北北部の土師器型式、第二型式に分類されるが混入と思われる。

(234、235) は楕形土器で、くの字状区画文が施文される。(236~239) は凸状に膨隆する隆帶文が、長方形区画文や入組沈線文とセットで施文される。なお、(238) は大型の壺形土器の口頭部である。

(242) も胴部の細長い壺形土器である。(245) は菱形区画文が施文され、(240、244) は前例があるので省略する。(243) は底部内側の写真で、この中にアスファルトが入っているものである。

- ☆ T.P 8→ (247~324)

- P.L21→ (247~253、260)、すべて第七群土器である。このうち、(249) は横円形区画文、(252) は撚糸文が密集して施文される特異な例である。

(255～258) は第九群土器(晚期)である。出土例が少ないので晚期として一括した。いずれも混入であろう。(255) は C<sub>1</sub>、(256) は C<sub>2</sub>式と思われるが破片のため断定はさけたい。(259) は第三群土器と思われる。

(261、262) は、三角形土製品で十腰内 I 式に伴うものと思われる。

- P.L22-(263～277)

(266) は第二群土器(上層 a 層)、(269～276) は一応、第六群土器に入れておく。(271) は口縁部の耳状隆起から、大木10式の仲間としておく。(277) は円筒上層 d 式かも知れないが本群に入れておく。

(263～265、267、268) は、条痕文の施文されたもので深鉢形土器と思われる。このものは第七群土器(十腰内 I 式)の組成の一部をなすものである。

- P.L23-(278～294)

(278～291、293、294)、これらのものは、いずれも第七群土器である。(280、283、286、288) は壺形、(281) は椭形、他は深鉢か腹形土器と思われる。

(292) は口縁部が折り返し口縁で、且つ膨隆している点から第三群土器(楕円形)と思われる。

- P.L24-(275～311) は、いずれも第七群土器(十腰内 I 式)である。施文パターンは、今まで述べてきたものの中に同類があるので省略する。

なお特に示すと、(311) は P.L9-(78) と、(310) は P.L10-(98) と同様の施文パターンである。

- P.L25-(312～323)、これらのものも第七群土器である。器形、文様パターンも前述と同様であるので省略する。

#### ☆ [B 地区出土土器] T.P10～13 → (324～351)

- P.L26-(324～338)、これらのものは、すべて第七群土器(十腰内 I 式)である。

(329) は椭形土器で他は、深鉢か鉢形土器と思われるものである。

(337) は、撚糸文を、たて・よこに交叉させた施文のもので、類例は少ないものである。

(338) は、X字状に撚糸文が交叉した施文のもので、これも出土例は少ない。他は、今まで述べた中に文様パターンの類例があるので省略する。

- P.L27-(339、340、342～348) は、第六群土器(大木10式)と思われる。

(339) は磨消手法による無文帶を有し、(340) は、繩文を地文に太い沈線による溝文が施文される。(343) は懸垂文の下端、胴部下半の破片である。

(344) は、口縁部破片で口頭部は無文で研磨されている。(347) は、口縁部が部厚く膨隆し

ているものである。この両者は大木8～9式にも存在するが、他の伴出七器から一応、この群に入れておく。

(341) は、刺突文、縦位の長方形沈線文（区画文）が施文される。この特徴から大木9式に比定されるものであろう。(342、345、348) は、第五、六群のいずれかに属するものと思われる。(249、350) は底部破片、(346) は中の平Ⅲ式、最花式で、(351) は第七群土器（十腰内I式）である。

B地区のうち、T.P13出土土器は、第六号土塙出土土器以外は中期末、第六群土器が多い。すなわち、T.P13の住居跡は、大木9～10式期のものと出土土器からも判断できる。

#### ☆〔C地区出土土器〕(T.P15、16)

○ P.L28—(352～363)、これらのうち、(360) は、第八群土器（十腰内II式）である。施文が交亘にくいちがっている。この施文法は、II式の文様パターンの一つである。他のものはすべて第七群土器であるが、そのうち、(353、358) は十腰内I式のうちでも古い方のものと思われる。

○ P.L29—(364～371) は、第六群土器（大木10式）土器と思われるが断定は控える。

口縁部が無文帯のもの(369)、折り返えし口縁のもの(365)、懸垂文の下半と思われるもの(370)、繩文地に沈線文を施文したもの(364、366～368)、口縁部から口唇へかけては無文で、他は繩文のみ施文されたもの(371)である。

施文された繩文は、複節(R.L.R)→(364、371)、○段多条のL.R→(366、367)である。すなわち後期十腰内I式とは、繩文そのものが異なっている。

○ P.L30—(372～377)、このうち(373) は、渦文と、それを縦位に懸垂する沈線文が施文される。これは、第三群土器（楓林式）の施文パターンと思われる。

(375、376) は第六群土器（大木10式）、(377) は第五群土器（中の平Ⅲ、最花式）である。

(372、374) は第六群土器の新しい方、すなわち大木10式b類、あるいは未命名の新型式に入るかも知れないが類例を持ちたい。

○ P.L31—(378～387) は、第七群土器（十腰I式）である。文様パターンは既述したものの中に同類があるので省略する。

○ P.L32—(388～392)、このうち(391、392) は、第七群土器（十腰内I式）、(388) は、第九群土器で晚期初頭、大洞B1式、(389) は、繩文の細かさ、施文から大洞BC式の可能性があるが不明としておく。(390) は底部破片で、中期末のものと思われる。

(393) は耳飾り、または耳栓といわれるものである。

○ P.L33—(394～400)、これらのうち(400) は第一群土器（下層d2式）、(395) は第二群

土器（上層 a 式）、(394、396、399) は第五群土器（大木 9 式）と思われる。(397、398) は、同一個体のもので、施文が特異である。しかし口縁が膨隆し地文が撚糸文である点は、大木系土器の特徴を示す。また刺突文もあり、一応大木 9 式に入れておくことにする。

以上、T.P 1 ~ T.P 16 にわたって、遺構外より出土した土器、土製品について概観してきた。すなわち第一～第十群土器に分類したが、第三群とした榎林式は別にして、第四群とした中の平 II 式、第五群とした III 式は、土器組成の内容が不備のため分類に際しては、中の平 II 式は大木 9 式 a 類、中の平 III 式は大木 9 式 b 類に比定して考慮した。しかし分類不可能な場合は、大木 9 式の名称を用いた。

各地区出土の土器を分類すると、A ~ C 地区は後期初頭十腰内 I 式、中期末の榎林～大木 10 式、前期末の d<sub>2</sub> 式期の三時期に大別されるものである。

(新 谷)

〔表Ⅲ〕 妻の神第二次発掘調査出土石器一覧表

| 種別  | 群別          | 類別 | P.L.No. | 計測値          | 出土地区、局位     | 石質       | 備考                                |
|-----|-------------|----|---------|--------------|-------------|----------|-----------------------------------|
| (1) | 石<br>器      | a  | 2       | 4.4×3.3×0.6  | TP8-a-IIa   | 暗灰色珪質頁岩  | ☆有柄石器<br>(4号土塁内出土)                |
|     |             |    | 8       | 3.7×1.6×0.8  | TP10-b-II下  | 蛋白石      |                                   |
|     |             |    | 9       | 2.6×1.0×0.4  | TP11-b-IIa下 | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             | b  | 1       | 2.9×0.9×0.4  | TP7-b-Ib    | *        |                                   |
|     |             |    | 5       | 4.2×1.5×0.4  | TP2-b-Ib    | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 7       | 4.4×1.3×0.6  | TP7-a-Ib    | *        |                                   |
|     |             | c  | 3       | 1.9×1.3×0.2  | TP2-b-Ib    | *        |                                   |
|     |             |    | 4       | 2.3×1.1×0.3  | TP2-b-Ib    | *        |                                   |
|     |             |    | 5       | 2.8×1.3×0.4  | TP11-c-IIa  | *        |                                   |
|     |             | d  | 6       | 3.4×1.5×0.4  | TP8-b-Ib    | *        |                                   |
|     |             |    | 10      | 2.2×1.0×0.4  | TP8-b-Ib中   | *        |                                   |
|     |             |    | 11      | 2.1×0.6×0.3  | TP8-b-Ib中   | *        | ☆無柄石器                             |
| (2) | 擦<br>削<br>器 | a  | 12      | 5.4×3.1×0.8  | TP15-b-Ib下  | 暗灰色珪質頁岩  | ☆有柄スクレーパー<br>(擦器)<br>side-scraper |
|     |             |    | 13      | 8.9×3.8×1.2  | TP7-a-IIa   | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 14      | 6.7×5.5×1.6  | TP1-b-Ib    | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 15      | 4.1×4.2×1.2  | TP15-a-Ib下  | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             | b  | 16      | 6.1×4.0×0.8  | TP7-b-IIa下  | *        |                                   |
|     |             |    | 17      | 8.3×2.5×1.2  | TP1-b-Ib中   | *        |                                   |
|     |             |    | 18      | 8.7×3.1×1.2  | TP7-b-IIa   | *        |                                   |
|     |             |    | 19      | 7.9×2.2×0.9  | TP7-a-IIa   | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             | c  | 20      | 4.5×3.7×1.4  | TP7-b-IIa   | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 21      | 10.4×4.5×1.1 | TP2-b-Ib下   | 黑色 硅質頁岩  | △印は現存性である。                        |
|     |             |    | 22      | 9.4×5.0×1.8  | TP1-c-IIa   | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 23      | 9.7×4.0×2.3  | TP7-b-IIa   | 灰白色 硅質頁岩 |                                   |
|     |             | b  | 24      | 5.2×4.6×1.8  | TP2-a-II    | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 25      | 9.3×6.5×1.3  | TP9-a-IIa下  | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 26      | 7.7×5.6×1.8  | TP2-b-Ib中   | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 27      | 9.5×6.3×2.3  | TP15-c-Ib下  | *        |                                   |
|     |             | c  | 28      | 4.7×2.8×1.4  | TP8-a-Ib下   | *        |                                   |
|     |             |    | 29      | 5.2×2.9×1.2  | TP7-b-Ib下   | *        |                                   |
|     |             |    | 30      | 4.7×3.1×1.1  | TP1-b-Ib    | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 31      | 6.0×3.7×1.0  | TP7-b-IIa   | *        |                                   |
|     |             | a  | 32      | 4.5×4.0×1.0  | TP1-b-Ib    | 黑色 硅質頁岩  | ☆無柄スクレーパー<br>(削器)<br>side-scraper |
|     |             |    | 33      | 4.1×3.2×1.1  | TP8-a-Ib    | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 34      | 4.2×2.6×0.9  | TP1-b-IIa中  | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 35      | 4.0×2.0×1.0  | TP15-a-Ib下  | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             | b  | 36      | 5.5×3.1×1.1  | TP8-b-Ib中   | 暗灰色珪質頁岩  | ☆スクレーパー<br>(削器)<br>end-scraper    |
|     |             |    | 37      | 7.3×3.1×1.3  | TP15-a-IIa  | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 38      | 6.6×2.8×1.4  | TP1-c-Ib下   | *        |                                   |
|     |             |    | 39      | 6.4×4.4×1.8  | TP15-c-IIb下 | *        |                                   |
|     |             | c  | 40      | 4.9×2.5×1.2  | TP8-a-IIa   | 茶褐色珪質頁岩  |                                   |
| (3) | 石<br>槍      | a  | 41      | 6.6×2.6×1.5  | TP8-b-Ib中   | 暗灰色珪質頁岩  | ☆後期十腰内工式<br>土器に伴うPoi<br>nL.       |
|     |             |    | 42      | 5.3×2.4×0.8  | TP8-a-Ib中   | *        |                                   |
|     |             |    | 43      | 7.0×2.3×1.0  | TP4-b-Ib下   | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             | b  | 44      | 5.2×3.4×1.2  | TP9-a-IIa   | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 45      | 9.5×2.9×2.0  | TP1-b-Ib下   | 黑色 硅質頁岩  |                                   |
|     |             |    | 46      | 8.3×2.9×1.3  | TP1-b-Ib下   | *        |                                   |
|     |             | c  | 47      | 7.4×2.6×1.2  | TP7-a-II    | 暗灰色珪質頁岩  |                                   |

|                 |    |   |      |               |              |        |  |
|-----------------|----|---|------|---------------|--------------|--------|--|
|                 | II | a | 48   | 18.0×4.9×3.5  | TP8-a-II a   | 黒色珪質頁岩 | ☆前期 d <sub>2</sub> 式土器に伴う                              |
| (4) 石斧          | I  | a | 49   | 13.2×10.3×2.3 | 表面採集         | 流紋岩    | ☆表層の両端に打欠きのあるもの。                                       |
|                 |    | a | 50   | 8.4×4.3×1.2   | TP1-c-I b中   | *      | *  |
|                 |    | a | 51   | 10.0×6.4×3.3  | TP7-b-I b    | *      | *  |
|                 |    | b | 52   | 11.9×6.4×4.6  | TP8-a-II a   | *      | *  |
|                 |    | b | 53   | 11.0×7.9×2.8  | TP7-a-I b    | *      | *  |
|                 | II | b | 54   | 9.7×6.5×2.3   | TP7-b-I b    | *      | *  |
|                 |    | c | 55   | 6.4×6.4×1.8   | TP13-c-II a  | *      | *  |
|                 |    | d | 56   | 8.5×5.4×2.2   | TP1-c-I b下   | *      | *  |
|                 |    | d | 57   | 11.0×9.4×2.3  | TP9-a-I b    | *      | *  |
| (5) 石斧          | •  |   | 58   | 6.8×4.2×2.4   | TP1-c-I b中   | 花崗閃綠岩  | ☆欠損品のみ、そのため一括する。                                       |
|                 |    |   | 59   | 3.2×4.0×1.9   | TP7-b-I b    | *      | *  |
|                 |    |   | 60   | 5.0×3.0×1.8   | TP7-b-II a   | 緑色凝灰岩  |  |
|                 |    |   | 61   | 4.0×2.2×6     | TP1-b-I b    | 玄武岩    |  |
| (5) 石斧          | •  |   | 62   | 5.6×2.1×1.2   | TP11-b-II a下 | 玄武岩    | ☆3号土壙上面より前記土器に伴出。                                      |
| (7) 半円状器<br>半石器 | •  |   | 63   | 14.2×6.5×2.0  | TP1-b-II a   | 流紋岩    |  |
| (8) 石劍          | •  |   | 64   | 9.5×5.1×0.6   | TP7-b-I b    | 玄武岩    | ☆石劍の一部のみ   |
| (9) クボミ石        | I  | a | 65   | 8.2×7.6×4.3   | TP8-a-III下   | 流紋岩    | ☆定形化の認められるもの。  |
|                 |    |   | 66   | 7.6×7.1×4.2   | TP8-a-I b下   | *      | *  |
|                 |    |   | 67   | 8.4×7.0×4.6   | TP2-b-I b    | *      | *  |
|                 |    |   | 68   | 10.2×7.2×5.2  | TP8-a-I b    | *      | *  |
|                 |    | b | 69   | 12.7×7.7×4.5  | TP7-b-I b    | *      | *  |
|                 |    |   | 70   | 8.8×7.1×2.6   | TP7-b-II a   | *      | *  |
|                 |    | c | 71   | 8.7×7.3×3.9   | TP2-b-I b    | *      | *  |
|                 |    |   | 72   | 9.4×8.8×4.5   | TP12-c-II a  | *      | *  |
|                 |    |   | 73   | 10.5×10.4×5.8 | TP1-c-II a   | *      | *  |
|                 | II | d | 74   | 10.1×10.1×5.8 | TP7-a-I b    | *      | *  |
|                 |    |   | 75   | 15.3×8.0×5.4  | TP15-a-I b   | *      | *  |
|                 |    |   | 76   | 14.8×7.8×5.2  | TP7-b-I b    | *      | *  |
|                 |    |   | 77   | 12.1×8.1×5.8  | TP7-b-I b    | *      | *  |
|                 |    | a | 78   | 9.9×8.4×6.8   | TP2-a-II a   | *      | *  |
|                 |    |   | 79   | 13.6×9.1×2.3  | TP1-a-I b    | 粗粒玄武岩  | ☆不定形なもの。   |
| (10) 石皿         | •  | • | 80-1 | 3.7×6.2×2.1   | TP10-b-II 下  | 青白玉    | 1号土壙内  |
|                 |    |   | 80   | 32.7×23.5×6.0 | TP7-b-II 下   | 緑色凝灰岩  |  |
|                 |    |   | 81   | 12.5×11.5×4.8 | TP1-b-II a   | 緑色凝灰岩  |  |
| (11) 石斧         | •  | • | 82   | 5.9×5.1×4.7   | TP7-b-I b    | 流紋岩    |  |
|                 |    |   | 83   | 4.6×3.7×4.6   | TP2-b-II a   | 硬質頁岩   |  |
|                 |    |   | 84   | 5.6×4.9×4.7   | TP1-a-I b    | 粗粒玄武岩  |  |
|                 |    |   | 85   | 13.0×9.5×6.1  | TP15-a-I b   | 花崗閃綠岩  | (注)<br>○計測値は下記による<br>●長径×短径×厚さ<br>■長径×巾×厚さ<br>▲最大巾×最大厚 |
| (12) タタキ石       | •  | • | 86   | 7.8×7.7×3.4   | TP1-c-II a   | *      |  |
|                 |    |   | 87   | 8.9×7.2×3.2   | TP9-b-III上   | *      |  |
|                 |    |   | 88   | 12.0×8.7×5.6  | TP3-b-I a    | *      |  |
|                 |    |   | 89   | 13.8×9.7×4.8  | TP7-a-I b    | *      |  |
|                 |    |   | 90   | 14.2×9.0×6.0  | TP8-b-III    | *      |  |
|                 |    |   | 91   | 14.9×7.5×3.6  | TP13-b-II a  | 玄武岩    |  |
| (13) 他の石器       | •  | • | 92   | 15.8×6.6×3.5  | TP1-b-II a下  | 安山岩    |  |
|                 |    |   | 93   | 14.3×9.4×2.4  | TP10-c-II a  | *      |  |

### 〔石器、石製品〕

石器および石製品の出土数は合計94点である。使用された石材の石質は殆んどが珪質頁岩で他に流紋岩が多く、蛋白石、花崗閃綠岩、綠色凝灰岩、玄武岩、安山岩が少量含まれる程度である。(石材の単純性については別項でふれる)

石器および石製品の種別とその群別、類別等は、表IIIに示すとおりである。

以下、表IIIに示す種別によって順を追って述べることにする。(註、文中の番号と写真の番号、および表IIIの番号は一致する。)

#### (1) 石 鐵

石鐵は全部で11点の出土である。発掘面積に比して極めて少ない数である。(このことについては考察の項でふれる。)

この石鐵を、I群(有柄)、II群(無柄)に群別し、さらに形状、特徴によってa、b、c類に類別した。

なお、使用された石材の石質は、(8)が蛋白石で他はすべて珪質頁岩である。

##### ☆〔I群〕(有柄石鐵)

○ a類(②、⑧、⑨)→鐵身が外湾してふくらみを持ち、柄部のつけ根がゆるく内湾するもの。②は長身、⑧はふくらみが強くすんぐり形で巾が広い。また⑨は小形のもので、いずれも柄部が太いものである。

○ b類(①、⑤、⑦)→鐵身の形状がほぼ二等辺三角形を呈し、且つ基部が直角に湾曲して柄部に接するもの。①は小形、⑤は長身、⑦は細長で調整剝離がやや荒いものである。

○ c類(③、④)→小形のもので鐵身がうすく、形状は二等辺三角形をなすもの。

③は特にうすいもので、表裏とも中央部に第一次剝離面を残すものである。④は断面が中高のもので、③より柄部のくりこみが強い。

○ d類(⑥)→身が厚く断面が菱形で、形状は左右の肩が張り、柄部をも含めて不整な四辺形をなすもの。剝離は表裏とも荒く、鐵身の両側辺は交互剝離のため曲線をなすものである。

##### ☆〔II群〕(無柄石鐵)

○ a類(⑩、⑪)→ごく小形のもので両面に第一次剝離面を残し、整形が不充分なもの。

⑩は基部が広く且つ厚い、⑪は細長く一見してドリル様であるが中央部より下半が偏平で、

先端は磨滅がないので石鏝としたものである。

## (2) 挖器、削器 (side-scraper, end-scraper)

スクレーパー (scraper) は全部で29点出土した。これらのものを形状と機能によって3群に分け、第I群（有柄）、第II群（無柄）、以上挖器、第III群（削器）に群別し、さらに各群をa、b、c類に類別した。これらのスクレーパーに使用された石材の石質はすべて、暗灰色または黒色の珪質頁岩である。

### ☆ [I群] (有柄スクレーパー→挖器)

○ a類 (⑪、⑫、⑬、⑭) → 柄部と刃部のなす角度が直角のもの、または45°~30°の角度をなすもので横形のスクレーパーである。

⑪は、柄部の左右、表裏に notch (抉入れ) を軽く入れたもので、刃部は斜行する。

⑫はかなり変形なスクレーパーで、柄部と刃部のなす角度は⑪より小さい。また刃部は内溝したものである。

表面は敲打による荒い剥離によって成形し後、押圧剥離により刃部と上方の側辺を整えている。裏面は第一次剥離面を残し、上面は並列剥離が丁寧に施されている。

また、裏面（主要剥離面）の刃部には、鋭い使用痕がある。打瘤 (bulb) が刃部の右下にあり、調整打面も見られるものである。

⑬は柄部の左側のみに notch を入れ柄部を作っている。表面は四度の敲打による荒い剥離面をなすもので刃部はごく細かいトリミング（細部加工）が施されている。

裏面は主要剥離面でトリミングはなされていない。打面は右にあったが欠失しているものである。

⑭は柄部と刃部のなす角度がほぼ直角で刃部は直線をなすものである。

表面の剥離は荒く、且つ柄部は階段剥離 (step-flaking) により整形されている。刃部は急再度で押圧剥離 (plassure-flaking) の手法により整形されている。また裏面は主要剥離面を残し、刃部のトリミングは荒い。

○ b類 (⑮) → 柄部と刃部が平行する縱形のもの。

⑮は小さい柄部を有し、刃部は両側辺にあるもので、特に左側辺の刃部は美麗な並列剥離が施され、右側辺の刃部は荒いトリミングのものである。中央部には第一次剥離面を残し、柄部は、表裏から左右に notch を入れたものである。

裏面は主要剥離面で、打瘤は剥離されている。下端にも簡単なトリミングが加えられており、

器全体が表面の方向にゆるく湾曲したものである。

なお、打面は柄部直上にあったが整形により剥離されている。

○ c 類 (⑦、⑧、⑨、⑩) → 細長い剥片 (flake) を利用したもので柄部と刃部が平行する縦形のもの。

⑦は、軽い notch により柄部を作り出したもので、断面が中高の三角形を呈し、且つ裏面の方向に湾曲する器形のものである。

打面は下端にあったが、わずかに打瘤を裏面に残す。刃部の右側辺、および下端はやや荒くトリミングされ、左側辺は急角度で一部にトリミングを見せる程度である。裏面は主要剥離面でトリミングはない。

⑧は、柄部の左側へ裏面より notch を入れたもので、表面には一部に自然面を残す。表面の剥離は荒くトリミングはない。

また裏面の下端に bulb を有し、主要剥離面であってトリミングはないものである。

⑨も⑩と同様、表面は四度の敲打により成形され、わずかに両側辺にトリミングを認める。裏面上端に打面と bulb を有し、両側辺にわずかなトリミングを認めるものである。

⑩は欠損品である。表裏とも両側辺にトリミングがあり刃部を形成する。また表裏両面に第一次剥離面を残すもので、上方の欠失部は、擦ることにより整形したものである。一応 side-scraper として、ここに入れておくことにする。

#### ☆ [II群] (無柄スクリーパー→搔器)

○ a 類 (⑪、⑫、⑬) → 大形の flake (剥片) を利用したもので、刃部は両側辺と下端にあり、且つ裏面に主要剥離面を残すもの。

⑪は器形が裏面の方向に湾曲するもので両側辺に刃部を有し、刃部の角度は急カーブで細かいトリミングが施されている。また下端の刃部は両側辺の刃部に比べ、ゆるい角度をなす。

裏面 (主要剥離面) には、わずかにトリミングを認める。上部には調整打面と打瘤があり撃打の方向を示している。

⑫は、巾の広い器形のもので下端が急角度に裏面の方向へ曲がるものである。

刃部は両側辺と下端にあり、かなり丁寧なトリミング (triming) がなされている。裏面 (主要剥離面) には triming はない。また bulb は下端の刃部の左側にあるが小さいものである。

⑬は断面が不整な台形をなすもので部厚いものである。また表面の一部には自然面も残っており、剥離も荒いものである。

刃部は左側辺のものは並列剝離が浅く、右側辺は荒く且つ階段剝離（step-flaking）により調整されている。

下端は厚く敲打によるにぶい角度の刃部を形成し、裏面には使用痕を認めるものである。

（このa類としたものは side-scraper と End-scraper の両機能を備えたものとして分類した。）

○ b類 (④、⑤、⑥、⑦) → 背部が肥厚し、刃部が一側辺から下端へかけて湾曲するもの。

④は表面の上部に自然面を残し、左肩に調整打面を持つものである。

刃部は左側辺から右下へ湾曲し急角度にトリミングされ、剝離痕は長く並列剝離が美しいものである。また右側辺はトリミングがない。

裏面は主要剝離面で、ポジティブバルブ、およびバルバースカーフ（bulbar scar）を見せるもので、左側辺（右側辺）にトリミングがなされている。

⑤は表面左側辺が部厚く敲打により剝離され、上面に調整打面を持つものである。上部は、step-flaking の手法で剝離され、下方は自然面を残すが磨いている。

刃部は右側辺より左下へ湾曲し、やや急角度にトリミングされたものである。

裏面は主要剝離面で、バルブ（打瘤）とバルバースカーフがあり、わずかに右側辺にトリミングのあるもので多少凸凹がある面をなす。

⑥は器形が楕円形をなすもので、表面上部が部厚く、右上面に自然面を残すもので、刃部は弧を描いてほぼ半周するものである。特に右側辺から下端へかけてのトリミングが丁寧になされている。

また裏面（主要剝離面）は、上部にあった bulb が剝離され、打面も敲打により剝離されている。裏面の刃部にはトリミングは殆んど無く、わずかに右側面および下端になされている程度である。

⑦は表面の上部および右側辺は部厚く、敲打により剝離されたもので形状はポイント状を呈する。

刃部は左側辺にあり、浅い並列剝離が美麗になされている。

裏面は、上部に打面と bulb を残し、右上方に step-flaking の手法による調整痕がある。

刃部の右側辺には、わずかにトリミングがなされ、器全体がやや湾曲しているものである。

この b類としたものは、意図的に部厚い背部を持ち、且つ刃部が湾曲するものを分類した。

○ c類 (⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬) → この類としたものは、小形のフレーク（flake→剝片）を利用したもので、背部が肥厚し、刃部が一側辺にのみあるもので形状は不定形のものである。

◎は、成形が悪く表面の左側面が厚いもので刃部は右側邊にあり、ごく簡単なトリミングがなされている。裏面は凸凹があり、整形の悪いものである。

◎も不定形な剝片を利用したもので、表面は左側面より下端にかけて厚く、刃部は右側面のみあり、しかも裏面にのみわずかなトリミングを見せるものである。

◎は打面が表面の上端にあったもので左側面が厚く、右側邊にトリミングのあるもので、上端の打面はプレーシュアフレーキング（押圧剥離→plassure-flaking）により剥離されている。

裏面は上方にbulbがあり、右下の側邊に部分的にトリミングがある。

◎は表面の上端に調整打面を有し、左側面は厚く平らに擦っている。刃部は右側邊にあり、トリミングは荒い。

裏面は主要剥離面でbulbは上端にあり、刃部には2~3か所にトリミングが点在するものである。

◎は、表面の右、および下端が厚く平面をなし、左側邊に刃部を持つものである。

裏面上部にバルバースカーフ（打瘤裂痕）を残すもので刃部のトリミングはない。

◎は欠損品である。中央に縫を見せ、両側邊に刃部を有するものである。器形その他は不明であるが一応この類に入れておくことにする。

### ☆【Ⅲ群】（エンドスクレーパー→削器）

エンドスクレーパー（End-Scraper）をその形状によって、a、b、c類に分類した。これらのものに使用された石材はすべて、暗褐色、茶褐色、黒色の珪質頁岩である。

○a類（◎、◎、◎）→形状が梢円形で基部が厚く、刃部が下端にあるもの。

◎は、表面の上部が厚く、両側邊に細かいトリミングが施され且つ下端がうすく丁寧にトリミングされたものである。

また裏面も両側邊から下端へかけてトリミングされているもので特に左側邊から下端が丁寧になされ、右側邊のトリミングは荒いものである。

◎は、上部が厚く、且つbulbのあるもので、長い押圧剥離によってbulbの一部を削っているものである。両面ともその側邊を細かいトリミングにより刃部をつくっているが下端はうすく且つ鋭いものである。

◎は横剥ぎによるフレークで、表面の右側が厚く左側邊はうすいものである。

刃部は下端にあるがトリミングはない。裏面は敲打による荒い剥離を見せ、右側邊に細かいトリミングを施すもので刃部にはトリミングはなく、剥離の結果をそのまま刃部としているも

のである。

○ b 類 (⑦、⑧、⑨) → この類としたものは、明確に一定型として確立できるもので上部がせまく、下方が広がる撥型の形状をなすものである。

⑦はかなり荒い剥離のもので、断面形が中高の形状を示すものである。

刃部は表面の下端にあり、中程度の長さの押圧剥離によって整形され、右側辺は敲打により整形されている。

裏面の左側に第一次剥離面を残し、下端の刃部は荒い整形である。縦の断面形から考えて片刃のものと見られるものである。

⑧はきわめて丁寧に整形されたものである。表面の中央上部に第一次剥離面を残すが下端の刃部を除く各側辺は並列剥離が美麗になされ、刃部のみはトリミングはない。

裏面は左側辺の中央部が大きく剥離されたほかは、すべて並列剥離がなされている。

刃部は急角度にトリミングされており両刃である。また縦断面は裏面の方向に湾曲しているものである。

⑨は上半分が欠失しているがこの類とした。表面の上部は敲打による大まかな剥離がなされ、右側辺と刃部は押圧剥離により整形されている。

裏面も刃部と、右側辺が押圧剥離と階段剥離によってトリミングされ、中央部に第一次剥離面を残す。刃部は両面とも急角度で両刃である。

○ c 類 (⑩) → この類としたものは上半が欠失したもので全体器形は不明である。

表面の中央部右側に稜があり、両側辺は急角度にトリミングされ、下端も急角度にトリミングされたものである。

裏面は主要剥離面でトリミングはない。このものは、部厚いものであり、下端の整形が丁寧になされていることから、End-Scraper として分類した。

以上、搔器、削器あわせて29点の出土である。本遺跡における石器の出土数から考えて Scraper が非常に多いと思う。このことについては考察の項で再びふれることにしたい。

### (3) 石 槌 (Point)

Point は7点出土した。このものを形状や特徴によって2群に群別し、さらに a、b、c 類に類別した。

使用された石材の石質は、すべて暗灰色、または黒色の珪質頁岩である。

☆〔I群〕→後期初頭上腰内I式上器に伴うもの

○a類(④、⑤、⑥)→小形の剥片を利用し、簡単な細部加工（トリミング）を施した不定形なもの。

④は先端が鋭く尖り、基部が丸味を持つもので、表裏とも荒いトリミングがなされたものである。剥離手法はstep-flakingによっている。

⑤はうすい剥片を利用したもので、先端が尖り、左側面は一回の敲打によって平らに剥離されている。

基部にbulbを持ち、表面にはトリミングはない。

裏面は自然面で左側邊に簡単なトリミングがなされ、基部右下にもstep-flakingによる剥離痕がある。見方によっては、背部を刀漬ししたナイフ形石器とも考えられるものである。

⑥は形状は柳葉形に近いpointである。表面中央部より基部へかけては自然面を残し、左側面は直角に近く、先端部にのみトリミングが施されている。

右側邊は細かいトリミングが急角度になされ基部はやや巾が狭いものである。

裏面は主要剥離面でトリミングはない。器全体が裏面の方向にゆるく湾曲するもので、断面は不整な四辺形をなすものである。

○b類(⑦、⑧、⑨)→この類としたものは、成形が不充分で剥離も荒く未完成のものを一括した。

⑦は形状は石鎌様を呈するものである。表面は押圧剥離の手法により荒く整形され、基部は部厚いものである。また右側邊に打面が見られるもので、ポジティブバルブがある。

裏面は中央部に自然面を残し、先端部と基部にはstep-flakingの手法によるトリミングが施されたものである。

⑧は細長い形状のもので断面は不整な四辺形を呈する。

表面左側は細かくstep-flakingの手法により整形され、上面の先端部、下端部は敲打により剥離されている。

左側面は一回の敲打による様状剥離である。右側面は荒い押圧剥離が加えられ、さらに縁辺は細かいstep-flakingにより調整されている。

裏面は、先端部と下端が丁寧にトリミングされており、特に下端はEnd-Scraperとしても使用できるものであるが一応pointの仲間とした。

⑨は表面の整形は、大まかなstep-flakingによりなされたものである。また裏面も同様な手法により整形され、中央部より下端へかけて第一次剥離面を残すものである。両側邊は一部交互剥離がなされているため曲線を描いているが全体的には直線をなすものである。

○ c 類 (⑦) → 柳葉形をなすもので定型的形状のもの。

わずか 1 点の出土ではあるが、point の一定型として類別した。この型のものとしては表裏とも荒い剥離痕を見せるもので、剥離手法は step-flaking である。

両側辺はうすく、中央部が厚い中高の断面形を示すもので、両側辺もやや曲っているものである。

☆ [第 II 群] → 前期末円筒下層 d<sub>2</sub> 式土器に伴なうもの。

○ a 類 (⑧) → 大形の打製石槍である。

⑧、1 点の出土である。このものは T. P11 の b 区、II a 層より出土したもので、第 3 号土塙上面において P. L. 3-16~29 の土器と一緒に出土した。

表面は大まかな敲打によって成形したもので右側辺が厚く、左側辺がうすいものである。

また先端部はうすく鋭いもので、下端はやや丸味を持って厚くできている。

裏面は、一部に自然面を残すが、先端部は step-flaking の手法を一部に用いて整形しているものである。

この point は、前記の I 群と伴出土器の型式が異なるので第 II 群として分類した。

#### (4) 石 錐

石錐は 7 点の出土である。これに表面採集のものを加えて 2 群に群別し、形状によって a、b、c、d 類に類別した。使用された石材の石質はすべて流紋岩に統一されている。

☆ [第 I 群] → 長軸の両端に打欠きを有するもの。

○ a 類 (⑨) → 偏平な不整四辺形を呈し、長軸の両端に打欠きのあるもの。

⑨は A 地区における表面採集品である。このものは、石錐としては大形のもので打欠きは、表裏両面から敲打により作られたものである。

今回の発掘においては 1 こも出土しなかった。

☆ [第 II 群] → 短軸の両端に打欠きを有するもの。

○ a 類 (⑩、⑪、⑫) → 形状が長楕円形をなし、短軸の両側辺に打欠きを有するもの。

⑩は偏平で表裏両面から打欠きを持つものである。

⑪は左側辺を step-flaking によりうすく剥離し、右側辺から裏面にかけて浅い溝を敲打により作り出したもので、別個に類別するのが正しいと思われるが数が少ないのでこの類とした。

すなわち、有溝石錐と、短軸の両端に打欠きを有するものの中間的変種である。

◎は断面が不整三角形をなす形状のもので、表面の左側面の一部と右側面の中央部に凹凸状の敲打痕を有し、打欠きは左右横方向の敲打によって作られたものである。

裏面は、表面の方向に湾曲しており、すりへらされているものである。

○ b 類 (◎、◎) → 形状が不整橍円形をなし、短軸の両端に打欠きを有するもの。

◎は左側辺を step-flaking によりうすぐ打欠き、右側辺は敲打によって横から打欠きを作ったものである。

a 類、b 類等は、石錘の形状によって分類したが、◎と本例はテクニック上では類似するものである。

後日類例待って、別個に類別したいと考える。

◎も◎と同様、左側辺の打欠きは左横より敲打によって作られ、右側辺は step-flaking により、うすぐ剥離されている。さらに上面は敲打によって整形されている資料である。

○ c 類 (◎) → 形状がほぼ円形をなし、且つ偏平なもので相対する両端に打欠きを有するもの。

◎としたものは火を浴びているものである。両端の打欠きは表面から斜めの敲打によって作られ、裏面からの敲打も同様なものである。テクニックがb 類と異なるものとして分類した。

○ d 類 (◎、◎) → 形状が不整長方形で角ばっており、且つ短軸の両端に打欠きを有するもの。

◎は小形で表裏面とも斜めの敲打により打欠きを作ったもので、◎も同様の手法によっている。

すなわち両者とも手法はc 類と同様のものである。この両者は打欠きの部分が凹を持っている特徴がある。

石錘の分類については考察の項でさらにふれることにする。

#### (5) 石斧 (◎、◎、◎、◎)

4 点の出土である。いずれも欠損品で下半の刃部のみのもの 3 こ、上半部のみのもの 1 こである。

類別すれば 3 類に分類が可能であるが類別せず一括して述べることにする。

これらのものに使用された石材の石質は、花崗閃緑岩◎、◎、緑色凝灰岩◎、および玄武岩◎である。

◎は下半分を残し、他は欠失したもので蛤刀をなすもので、断面形は橍円をなすものである。刃部は円弧状をなし、全面が磨かれた磨製石斧であるが全体形は不明である。

◎も◎と同様のもので、やや小形のものと残存部から推定できるもので、テクニックも同様

である。

⑤は、上端部の破片で、やはり磨製のもので、側辺の開きから見て刃部の広い典型的石斧の残欠と見られるものである。

⑥は、ごく小さい石斧様のもので、両側刃および刃部とした下端が擦ることにより再生されたもので、一見して石棒状のものの剥片を再加工したと思われるものである。

#### (6) 石 棒 (⑤)

1点の出土である。このものは磨製の石棒または小形石斧の残欠と見られるものであるが、一応石棒の可能性が大きいと判断して分類した。

石材の石質は玄武岩である。表裏面とも磨かれたもので両側面は平面をなす、すなわち断面は、長方形で上、下の辺は湾曲するものである。2号土塙上面より円筒下層 d式土器とともに出土した。(P-L40-62)

#### (7) 半円状偏平石器 (⑥)

1点の出土である。使用された石材の石質は流紋岩である。

器形は背部が厚く、直線をなし刃部は先端より曲線を描いて湾曲するもので、下方は内溝してうすく整形されている。

表面中央部は擦ることにより平らに整形され、裏面は自然面を残し、多少凸凹がある。

刃部は階段剝離の手法により側辺より中央部の方向へ剝離され、丸味を持った刃部をなす。

背部も同様の手法で整形され、下端は内湾する刃部を形成する。しかも下端の刃部は片刃状に裏面へゆるくカーブするものである。

いわゆる繩文前期、中期の半円状偏平石器と手法において異なっている。(このことについては考察の項でふれることにする。)

#### (8) 石 剣 (⑦)

1点の出土で、使用石材の石質は玄武岩と思われる。巾広の石劍の一部分の剥片で、全体形は不明である。

#### (9) クボミ石

クボミ石は全部で15こ出土した。これらのものを形状の特徴によって2群に群別し、さらにa～d類の7類に類別した。

使用された石材の石質は、⑦は粗粒玄武岩で他はすべて流紋岩である。

☆〔第Ⅰ群〕→定型化の認められるもの。

○a類(⑩、⑪、⑫、⑬)→形状が三角形を呈し、上下の二面にクボミを有するもの。

⑩、⑪、この2つがa類の標準型として分類したものである。底面が不整三角形を呈し、上面が中高のもので、頂部と底面の中央にクボミを有するものである。

⑫、⑬、底面、上面の形状が不整三角形を呈し、三側面がほぼ平面をなす形状の三角形多面体のもので上下二面にクボミを有するものである。

なお⑭は焼けており且つ欠損品である。

○b類(⑭、⑮)→形状が梢円形を呈し、上下二面にクボミを有するもの。

⑭は、この類の一タイプとして分類したものである。上下二面は擦ることにより平滑に磨かれ、一部に火を浴びている。

⑮は、欠損品である。⑭に比して器厚がうすく、偏平なもので、やはり上下二面に磨痕を残している。

○c類(⑯、⑰、⑱)→形状が不整円形をなし、上下二面にクボミを有するもの。

⑯は形状がやや梢円に近いもので、上下両面の一部に磨痕があるもので一側面が厚い器厚を示す。

⑰は底面が平らに擦られ、上面にクボミ、下面是敲打痕が小さざみにあるもので、上面は磨かれている。

⑱は、巾が広く且つ下部が厚く上端がうすいものである。上面にクボミがあり、裏面は、上部から下端へかけて剝離され凸凹がある。この裏面は火を浴びている。

このものも上面、下面に磨痕を認める。この3点はセットで標準タイプとして分類した。

○d類(⑲)→形状はほぼ円形なもので、上下にクボミを有するもの。

⑲は、やや厚い円形をなすもので、上下二面にクボミがあり、且つ上面は磨痕が側面一体に残るものである。

☆〔第Ⅱ群〕→不定形なもの。

○a類(⑳、㉑、㉒)→不整な長方形または梢円形をなす多面体で、クボミが3~4面にあるもの。

㉑は、一側面がほぼ平面、下部は丸味を持ち、他の2面は斜行して刃部を作るもので、機能的には偏平石器とクボミ石の両者の機能を有する形状である。

クボミは、背部、左、右側面にあるもので、多目的に使用されたものと思われる。

⑦は、上方が丸味を持ち、下方が角ばる形状でクボミは、3面に1~3ヶ所長軸に並んで残るものである。

⑧は、前二者に比して短かく、下方が丸味を持ってふくらむもので、4面にそれぞれ1~2ヶ所のクボミを残すものである。

このa類とした多面体クボミ石は、クボミが長軸に沿って縦に2~3ヶ所つけられるのが常である。

○b類 (⑨) → 形状が不整球形を呈し、クボミが上、下、左、右の四か所にあるもの。

⑩は下半の一部が欠けており、中央にも亀裂があるものである。下半の欠損は、敲打によるものである。

○c類 (⑪) → 偏平で不整な形のもの。

⑫は表面中央部に溝状のクボミを持ち、裏面は凹状にかるく内湾する器形で、やはり中央部にクボミが連続して溝状を呈するものである。また、表、裏面、側面とも一部に擦痕を認めるものである。

#### (9) 石皿 (⑨、⑩)

石皿は2点の出土である。数が少ないので類別せず一括した。使用された石材の石質は、⑨は緑色凝灰岩、⑩は溶結凝灰岩である。

⑨は、一部欠損の他は完形品で、T.P.7のⅢ層下より出土した。計測値は表田に示したとおりであるが、この石皿の上面には十腰内1式の土器片が群集して出土したのでこの期のものと考えられる。

⑩は欠損品のため、全体器形は不明であるが、⑨と異なり、底部に至る側面には段がついたものである。また上面、下面とも凸凹があり、上面に2ヶ所、下面に1ヶ所のクボミがある。また表、裏面、および側面も擦ることにより整形したものと思われる。

#### (10) 石簾 (⑪、⑫、⑬)

3点の出土である。使用石材の石質は、流紋岩、硬質頁岩、粗粒玄武岩である。

⑪は不整な球形をなすもので、一部に擦痕を認めるものである。

⑫は、球形の下端を平らに打いたもので、小球形をなすものである。

⑬は不整球形をなし、細かい亀裂が入っているものである。

### ⑪ タタキ石 (⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮)

タタキ石は全部で6この出土である。石質はすべて花崗閃綠岩であり、このものは地質的に当遺跡付近ではないものである。したがって搬入されたものであろう。

⑩、⑪、⑫、形状は偏平な円形または不整な橢円形で、⑬は長軸の両端に敲打痕があり、表面は凸凹かあって裏面は平滑で平面をなす、⑭は表裏とも平滑面をなし、形状も円形であって、わずかに一側面に敲打痕を残す、⑮は、表裏とも凸凹が烈しく、形状は長円形である。長軸の一端が敲打により欠けしており、反対の一端は削離されているものである。

⑩、⑪、⑫、これらのは、形状がいずれも橢円形で、⑬は長軸、短軸の四側面に敲打痕を残すもので、かなり風化したものである。⑭は、偏平で大形のものであり、表裏とも美麗な平滑面を持つ、また短軸の両側面は磨かれて平面をなし、且つ長軸の上下端には敲打痕を残す。⑮は、前二者に比べ器厚が厚い形状のもので、四側面に打痕を残すものである。

### ⑫ その他の石器 (⑯、⑰、⑱)

その他の石器としたものは3点の出土である。石質は⑯→玄武岩(92.93)→安山岩である。また形状は長橢円形、または橢円形である。

⑯は美麗に磨かれて平滑面をなし、A地区3号土括上のIIa層下の出土で、単独出土である。

⑰は加工痕のないものであるが、B地区7号土括内床面上より出土した。

⑱は橢円形で偏平なものであり、側面は敲打により整形され、表裏面とも凸凹が烈しいものである。

\*その他、角礫、フレーク等多数の出土があったが省略した。

## VII 考 察

### (a) 層序と生活面について

本遺跡の層序の検討と、それに関する遺物、遺構との関係をまず最初に考えてみたい。

遺物包含層は、IV、層序の項で述べたように、第I層としたIa、Ib、第II層としたIIa層が中心であった。また例外的に第III層にも含まれることは既述したとおりである。

土器の出土状況をみると、A地区では、Ia、Ib層から主として、第七群とした十腰内I式土器が出土し、それに第三～第十群土器が混入する。また、IIa層とした包含層には、第七群土器（十腰内I式）とともに、第三～六群土器（大木系土器）が多く出土する。

さらに、T.P7の発掘面は、凹地となっており、Ia、Ib、IIa層には、十腰内I式土器が多く、且つ大木系土器が混在し、特にIIa層下端、III層上面には、両者が廻棄場の様相を呈し混在していた。

以上のことから、十腰内I式土器を使用した人々は、自分たちの使用した土器とともにそれより古い大木系土器をこのT.P7に投げ捨てたものと考えられる。

さらに、セクション図、A1、2を検討すると、T.P1ではIb層下端にも生活面が存在した可能性がある。（A1.）、また、A2を見ると理解されるように、IIa層が二段に分けられ、その中間に、土壇状に木炭混入層があり、この層の上面に、注口土器（写4）を入れた小土塙が見られる。

また、下段のIIa層下端からは、（9号土塙の床面）大木8b式土器が出土したことから、少なくとも、三時期以上の遺構が重層していることがわかる。

のことから、①第I層下端、IIa層上面に十腰内I式土器を使用した生活面が存在した可能性が強い。さらに②T.P7の状況から、第III層上面にも、十腰内I式期の生活面があったものと判断される。

このIIa層上面とIII層上面の生活面は、出土土器の型式から見て十腰内I式期の時間的長さを示すものとは捉え難い。むしろ、IIa層上面は、生活地表面であり、III層上面は、構築物の表面と捉える方が自然のように考えられる。そのことはIIa層上面には、石闌等のない円形の焼土のひろがりが認められることからそれを一つの証拠として、とらえることが可能であろう。

つぎにB地区について考えると、この地区では、Ia、Ib層には、第七群土器が多く、大木系土器は少數混入する。IIa層では、大木系土器が多く、第七群土器は少ない傾向を示している。この地区は、土塙にかかる土器以外はごく少量の出土であって、資料は乏しいが一般的の傾向としてはこのことを認めてよい。

この地区的遺構（1、2、3、4、5、6号土塙、住居跡）は、いずれも、IV層上面に開口部

や、床面を有し、且つ土塙内には、Ⅲ層としたローム層が木炭粒を混入して堆積しており、自然堆積でないことは明らかである。

のことから、Ⅳ層上面に、生活面があったものと判断される。このⅣ層上面を生活面とした時期は、土塙内の遺物から（土塙内出土土器の項参照）、十腰内Ⅰ式期、円筒下層d<sub>2</sub>式期、さらに、大木10式期にわたるものである。

C地区では、Ⅰb、Ⅱa層に、円筒下層d<sub>2</sub>式、上層a式、大木系土器、十腰内Ⅰ式土器が出土する。特にⅢ層上面には、上記の各期の土器が疊群とともに廃棄場の様相を見せており、且つⅢ層を堀り込んだ13号土塙がある。のことから、Ⅲ層上面に生活面があったものと判断される。

しかも、C地区では、焼土がⅢ層に、B地区では、Ⅳ層上面に、A地区では、Ⅱa層上面に、それぞれ遺構とともにセットで存在する事実を見逃せない。すなわち、この層位に生活面があったことは確かであろう。

しかし、生活面そのものが即地表面とは考えられない。地表面を層序から求めることはできないが現在とはほぼ変わらないのではなかろうか。

A地区的T.P 7、8においては、第Ⅰ、Ⅱ層は凹地のために相当厚いので、層序の上に生活面が上下して観察できたが、B、C地区は、本来うすいために、Ⅳ層上面に生活面を各期とも設定する結果になったものであろう。

#### (b) 遺構について

☆土塙…土塙は、前述したとおり、1~13号としたものを、1~5類にその形状によって分類した。

○1類とした、1号、7号土塙は、その形状からフラスコ型土塙として類別したものである。

この1類土塙は、さらに、a類とb類に類別される。a類（1号土塙）は、平面プランもフラスコ型であって、しかも階段のある入口部を備えた特殊な形状を示すもので、この型のフラスコ型土塙の標準的土塙に学史上活用される価値を有するものである。（図版7.）

南方を向く入口部には階段を3段つけ、直立する柱穴と北に斜行する柱穴とを備えたものである。入口部を入いると、平面形が円形でふくらむフラスコ型で、塙底の床には貼り土を2~3cmの厚さで貼りつけた特異なものである。

従来、フラスコ型土塙の用途は、諸説があって、貯蔵穴、ねぐら、落し穴、墓塙等々、多目的に活用された例が報告されているようである。事実その証拠となる事例も蓄積されつつあって、ほんの多目的な使用として定説化されるのであろうが、本例は、前述した形状、構築法から可能性を探ると、ねぐら説をとらざるを得ないものと考察される。すなわち、柱穴の配列、入口部と階段、貼り土の塙底、さらに広さ、土塙外の焼土の存在等によって考察したものであ

る。なお、このことについては、総合的に後述したい。

b類とした、7号土塙は、開口部が円形プランで土塙内がふくらむフ拉斯コ型であって塙底に貼り土は存在しない。遺物も土器片と礫2このみで用途を考察する資料はない。

1号、7号土塙とも、十腰内I式土器を出土したので同型式の土器を使用した人々の構築物と考えられる。但し、1号、7号土塙の形状の違いを、使用目的の相違として捉え、同時期の機能差としてセットとするか、十腰内I式土器の使用期間の長さを考え（十腰内I式土器は、五型式に細分され使用期間は相当長期間と筆者は考えている）て形態の推移による相異として捉えるかは今後の研究課題と考えられる。筆者は、b類が古く、a類は新しいと考えている。

それは、大木8b式土器を伴う9号土塙としたU字型土塙の発展した形態として、7号土塙をとらえ、この7号土塙の発展として1号土塙を捉えるからである。

そのわけは、十腰内I式土器の型式編年観としての、1号土塙出土土器の綱目状攢糸文（第一種）の施文文様と、7号土塙出土の土器文様（平行沈線文を中心とする文様等）に新旧の差を認めていること、さらに、土塙の構造に技術差があるからである。この技術差は、柱穴の配置、入口部の設定、貼り土、塙底が東から西へ傾斜し、且つ中央部が凸状に高く、塙底周囲が低い設計の1号土塙と、塙底が平面である7号土塙とは、土塙の機能差あるいは、使用目的の相異をぬきにしても明らかである。

すなわち、ここで述べたいことは、構築技術の高、低は、土塙の使用目的を超越して、新旧の区別に有効であるという前提に立って述べているのである。

さらに、十腰内I式期には1号土塙を2こ、入口部を連結することによって、不整なひょうたん型土塙に発展する可能性を持っていることを指摘しておきたい。この問題は、未だ可能性があると考える段階であって、第一次調査の資料に類例を認めるが細部の検討は今後の課題としておくことにしたい。

○2類とした、2、3、8、9、10号土塙は、ほぼ直壁をなす、U字型土塙である。

このうち、2、3号は、円筒下層d<sub>2</sub>式土器を伴い、9号は、大木8b式に比定される土器を伴う、8、10号には遺物の検出はなかったものである。

2、3号は、下層d<sub>2</sub>式、9号は、中期末大木8b式比定土器という地区を異にするが極めて時間差が大きい。

形態的な差異、テクニック上の差異も認められないものである。ただ、2、3号は地表より浅く、8、9、10号は深い地表下に存在する。これは、地形の差に原因があるのであろう。

土塙そのものの深さは、ほぼ50cm～60cmの間に求められる。これは、土塙の機能に深い関係があるものと考察される。

この2類としたU字型土塙は、a、b、c類の3類に形状や遺物によって分類される。

a類（3号土塙）は、塙底中央に、すり鉢状の丸底のクボミを備えたものである。このPitは、柱穴と異なり、浅く丸底をなすもので、第一次調査においても類例があるので、一つのパターンとすることが可能である。

b類（9号土塙）は、塙底面上より、木灰とともに土器片（前述の大木8b式土器）が出土し、且つ木灰層の下、土器片があった下部が焼けた焼土となっていたものである。この状態から他の土塙との機能差として分類した。

c類は、特徴的な事項が認められないものを一括したもので、2、8、10号土塙である。8、11、12号は完掘せず、10号は、9号土塙が10号土塙の一部を拡張して構築しているので不明であるが、プラスコ型の疑いもある。

これらの土塙は、いずれも確認面に、円形の焼土を伴う傾向があることと、土塙内出土土器の大半が二次的に焼けている点に注意したい。

この二点は、共通している、土塙の機能と何んらかのかかわりがあると思われる所以今後も留意したいと考える。筆者は、土塙と、土塙上面の円形にひろがる焼土とは、常にセットをなものと考えている。

また、土塙の構築にあたっては、古い土塙を切って掘り下げている点に注目したい。形状も深さも新旧とも、ほぼ同様であり、生活面も同一であるのが不思議である。Pit（柱穴）の掘り下げから古い土塙は、わかっていたのではないかと考えられる。そこに当時の人々の土塙に対する思想があったのではないかと疑うことはできないものだろうか。

○3類とした、4号、5号土塙は、それぞれ1こずつの石鐵を土塙内より出土したもので、土塙内からは、土器片等の出土はない。これらの土塙の上面、IIa層下位より十腰内I式土器（P.L26-324~329、320~3334）が出土したが、土塙の時期をこれによって判断するのは避けたい。

この3類とした土塙は、平面プラン、深さ等に近似性がある。1号、2~3号土塙の付属施設とも考えられるが断定は控えたい。

○4類（6号土塙）とした6号土塙は、土器の埋蔵用土塙である。置石下に十腰内I式土器が出土した。

○5類（13号土塙）としたものは、4類と同様、特殊な土器（写5）を埋蔵したもので、土器は、大木10式に比定されよう。

この4、5類土塙は、土器の埋蔵用と考えられる。5類は、平面プランは円形、4類は、ひょうたん形をなすもので、土塙の一つのパターンとして捉えるには、類例の増加を持ちたい。  
☆住居跡…住居跡は、破かいされ、壁面の一部と炉跡の一部が残存するものである。

炉跡の大きさ、石組みの状況、および床面上出土土器から中期末大木10式期のものと判断さ

れる。後期初頭十腰内Ⅰ式土器を伴なう石組み炉に比して、規模が大きく、使用石材も大きい。一般に中期の炉は後期のものに比して大きいのが特徴と思われる。

#### ☆柱穴について

柱穴は、個々について述べる紙数がないので特徴的なものについて述べる。

①柱穴内に段のついているもの、B地区で3例。②柱穴内に土器片を混入しているもの2例。③2つの柱穴が切り合っているもの。④土塙内にあるもの。⑤斜位に掘られたもの3例。⑥柱穴の底面が平面をなすもの。⑦底面が丸底をなすもの2例、等に分けられる。

このうち、①、⑦が注目に値する。最も多いのが、形狀的には⑥である。また、大小、深浅については、図版7.8、微細図IIに示したので省略する。

#### (c) 出土遺物

☆土器について…出土土器は、表IIに示すとおり、第一～第十群に分類した。この各群土器の型式編年についても表IIに表示したとおりである。

このうち、第二(上a)、第九(晚期)、第十(土師器)群土器は、1～5片程度で混入と見られる。

土塙内出土土器は別にして、他の第一、三～八群土器は、層位的に区別ができず併出する状態で出土した。その原因は、前述のとおり三時期以上にわたっての擾乱によるものと考察される。これが本遺跡の一つの特徴と見られる。

土器の出土量は、第七群土器が最も多く、ついで、大木系土器である第三～六群土器が多く、第一群(下d<sub>2</sub>式)土器は、土塙(2、3号)内出土のものを除くと、ごく少量である。

のことから、本遺跡は、後期初頭十腰内Ⅰ式期において生活場面として最も盛んに利用され、つぎに中期末の中の平田(大木9式、最花期)に、ほぼA、B、C地区にわたって面として全面的に利用され、前期末の下層d<sub>2</sub>式期には、2、3号土塙等、点としての利用であったろうと考察される。このことは、第一次調査をも含めて言えるものと思われる。

第三～六群とした、いわゆる大木系土器群としたものは、純粹の大木式土器ではなく、大木式土器の影響を受けて、この地域に発生した地域的特色を有する土器としてとらえ記述している。

このうち第三群(楓林式、大木8b式)、第五群(中の平田、大木9式)が多く、第六群(大木10式)がつぎに多い。第四群土器(中の平II式)は、一片のみ識別した。

筆者は、この大木系土器群は、第三～六群を含めて当地域では同一時期のものとし、大木系土器として一括りして捉え、その中における土器組成の様相として第三～六群を三ブロックの文化相としてとらえたいと考えている。

なぜなら当地域では同一層、同レベルで、これらの土器群が出土するからである。すなわち、

これらの土器群は、その様式遺跡において編年型式として成立するものであろう。それらが伝播の過程において、同一時期にブールされると考える方がむしろ自然であろう。土器の型式を単に分類のための手段、序列決定の方法としてのみ考えるのでなく、地域と時間の両者から文化相のブロックとして再考しなければならない。

下巻内 I 式土器群については、細分の可能性をたびたび指摘されているところである。

この問題については、層位的な把握ができなかつたので省略する。

#### ☆石器について

石器の個々について述べる紙数に乏しいので要約のみ述べることにする。

石錐は、きわめて出土数が少ない。サイドスクリーパーのうち、フレークを利用したものには、刃部の反対、すなわち背部は 1 回～2 回の打撃によって部厚い背部をつくるパターンが認められ、一つのテクニックとして確立されている。

本遺跡の特徴として、クボミ石と石錐が多い点があげられる。

クボミ石については、分類の試案を石器の項に、石錐についても形状とテクニックの両面から、分類試案を述べてあるが、当方では長軸の上下に打欠きを持ったものが少なく、短軸の左右にそれを持つものが一般的で地域的傾向と言えるのではないかと思う。

石器については、詳細は石器の項にあるので以下は省略する。

#### (d) 本遺跡の土地利用と性格について

この項では、まとめの意味で本遺跡の総合所見を述べてみることにしたい。

① 1 号土塙については、ねぐら説をとったことはすでに述べた。このことは、本遺跡の性格に関する問題を含んでいるように考えられる。妻の神遺跡の第一次、二次発掘面では、第一次調査の第 1 号住居跡が後期初頭のものとされている。この住居跡はきわめて小さいものである。

すなわち、この両者は長期間の住居とは考えられない。しかも両者とも貼り床を持っている点が共通する。

のことから第 1 号住居跡を含めて短期間のねぐら説をとった根拠である。短期間のねぐらとすれば、その滞在時期が問題となると思う。それは生産に関する問題であり、季節に関する問題と相關するものであろう。

すなわち、ある時期のねぐらとして 1 号土塙、小住居跡をとらえた場合、ある時期とは獲物、または採取にかかる時期であり、生産はその用具の機能によって判断する以外に方法はないものであろう。

さきに述べたように、石錐の出土数は発掘面の面積・土器の総量に比して、きわめて少なく石錐、クボミ石、タタキ石が多い点に注目したい。

特にタタキ石は花崗閃緑岩に統一され、このものは遺跡周辺にはないもので他地域に求めなければならないものである。

このあたりに本遺跡の性格解明のカギがありそうである。

また発掘面のほぼ中央、T.P10~13の地域は第一次調査を含めて遺構群（土塙）が密集しており、主としてフ拉斯コ型・U字型土塙が存在する。また、前に述べたように遺跡の北端・南端に土器等の廃棄場を配置しているのも、生活面の活用という当時の人々の土地利用に関する方式として捉えたい。

以上の諸点から、十腰内Ⅰ式期においては1号土塙・第1号住居跡は、ある季節のねぐらであり、この両者は床面の広さから二人以上は住めない広さである。

これらをねぐらと仮定すれば、他の土塙は落し穴・貯蔵穴の可能性が生まれてくるのではないかと思われる。

それはタタキ石、クボミ石、石皿、スクレーパーの組合せ、石鍤によっても推定が可能であり、これらの用具を必要とする生産に従事したものと推定することが可能であろう。

また中期末、前期末においても、ほぼ相似した理由で本遺跡を生産の場としたものと考察される。そして、その時期は秋ではないかとも推察される。

秋は妻の神川をのはるサケの季節であり、諸種のものの収穫の時期だからである。

以上は推察であるが、いずれにしても本遺跡は季節による狩漁場として好適な条件を備えていたものと考えることができる。

(新谷)

☆おわりに

妻の神遺跡の発掘報告書をまとめるにあたって、種々援助を賜わった方々に厚く御礼申し上げます。

この報告書が妻の神遺跡の研究に幾分でも役立つとともに、縄文時代後期初頭ならびに前期末、中期末における文化の研究にあたって、いささかでも貢献できれば幸いに思います。

#### 【参考文献】

- 1、青森県教育委員会(1974)：中里町大沢内溜池遺跡発掘調査報告書
- 2、同(1975)：白山堂遺跡、妻の神遺跡発掘調査報告書
- 3、藤井敬三(1966)：5万分の1地質図幅説明書「金木」地質調査所
- 4、飯本・原田・籠瀬(1968)：津軽平野北部の地域的特色  
・日大文理学部自然科学研究紀要1
- 5、岩木山研グループ(1973)：岩木山の火山灰層序  
・日本地質学会東北支部講演会口答発表
- 6、水野裕・堀田報誠・葛西良徳(1967)：津軽屏風山砂丘の地形・東北地理20-1

- 7、小貫義男・三位秀夫・島田景郎・竹内貞子・石田琢二・齊藤常正（1963）  
　　：青森県津軽十三湖地域の沖積層  
　　・東北大学理学部地質古生物学教室研究部文報告第58号
- 8、梅 津 昭 雄 （1967）：津軽平野北東部の段丘地形・弘大地理
- 9、海 津 正 倫 （1976）：津軽平野の沖積世における地形発達史  
　　・地理学評論第49卷第11号
- 10、芹 沢 長 介 （1960）：石器時代の日本 燁地書館
- 11、名久井 文 明、他（1968）：東 日 流 金木高等学校郷土研究部
- 12、今 井 富士雄、他（1968）：十腰内遺跡（岩木山） 岩木山刊行会
- 13、田 村 誠 一 （1968）：大曲Ⅰ号遺跡（岩木山） 岩木山刊行会
- 14、江 坂 輝弥編 （1970）：石神遺跡 石神遺跡研究会
- 15、村越潔・鈴木克彦（1975）：中の平遺跡 青森県教育委員会
- 16、村 越 潔、他（1976）：妻の神遺跡 青森県教育委員会
- 17、村 越 潔、他（1976）：泉山遺跡 青森県教育委員会
- 18、鈴 木 克 彦 （1976）：東北北部における大木系土器文化の編年的考察  
　　北奥古代文化8号・北奥古代文化研究会
- 19、渡 辺 誠 （1976）：縄文時代の漁業 雄 山 間
- 20、金木郷土史編纂委員会（1976）：金木郷土史 金木町役場
- 21、新 谷 雄 藏 （1977）：深浦・一本松遺跡 深浦町教育委員会

竪 1 号土壤 (フラスコ型) 全景 (南東より写す) (T, P 10~11-hc 区)

写 2



写 3



竪 6 号土壤 (ひょうたん型) 全景

写  
4

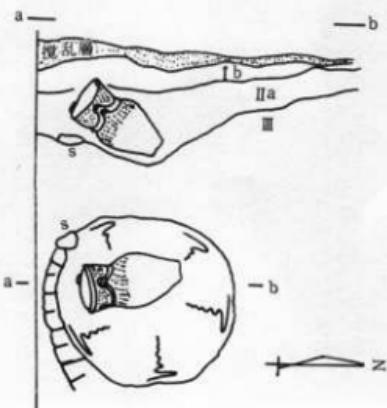


立セクション図、No.2 参照  
器高 7.4 × 口径 4.6 × 洞  
最大径 9.4 × 底径 4.0

写5

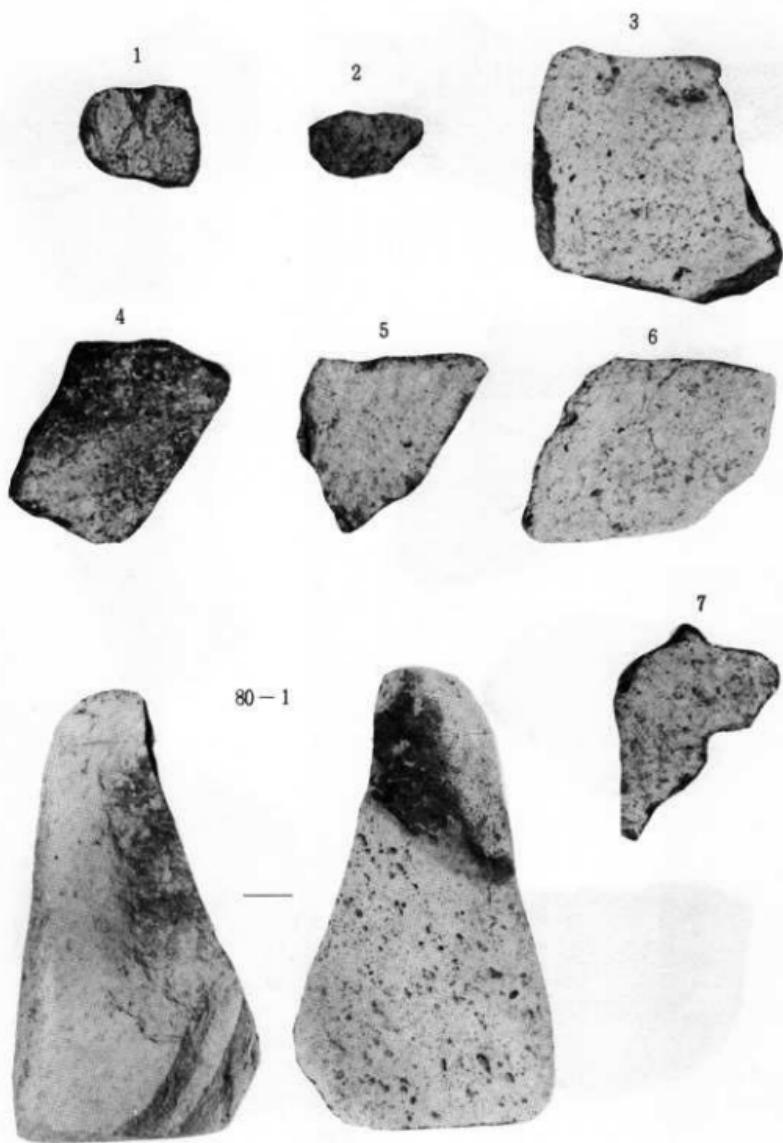
立 T. P 16-13号土壤内出土土器

$\frac{1}{20}$  実測図

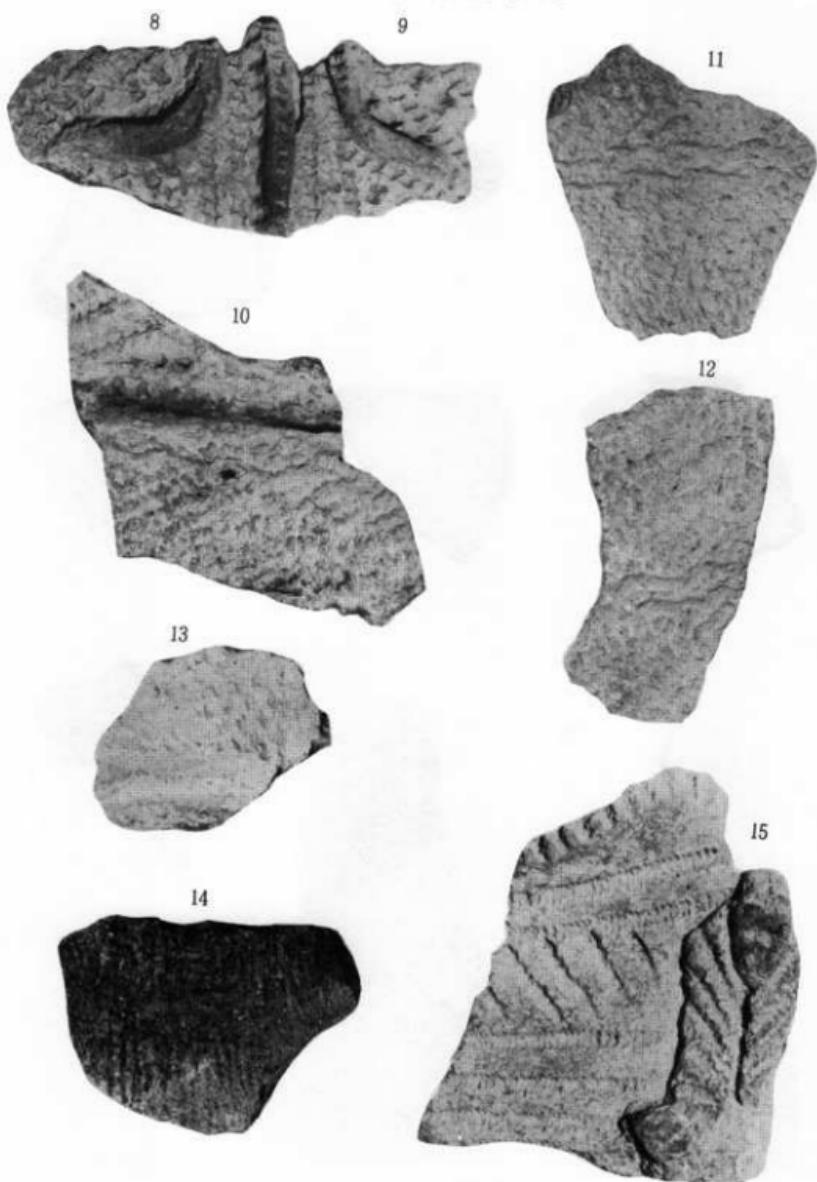


・器高 34 × 口径 20.8 × 洞  
最大径 18.1  
× 底径 6.5

(第1号土壤出土) P、L1



P、L 2 (第2号土壤出土9~13、第3号土壤出土14、15)



(第3号土壤出土) P、L 3

